
気持ち

サンバシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
気持ち

【Nコード】
N7554N

【作者名】
サンバシ

【あらすじ】
社会人になっても、人の気持ちに疎いと言われる笹原可奈ささはら かな。そんな人間が、人の気持ちを手取るように分かるようになったら、どう動く??
それに付き合う同僚の気苦労はどんな結末になるのか。
ちよつとファンタジーなラブコメ。

本編、番外編も完結しました。ありがとうございました。

第1話

朝、起きたら、人の気持ちが分かるようになっていた。
んな馬鹿な。

* * *

職場のそんなに広くもない会議室。

大きな窓から気持ちの良い太陽の光が入り込むけれど、フィルムが貼ってあるとか何とかでそんなに眩しくない。不思議な仕組みだよな。んで、その会議室では定例の火曜会議が行なわれたわけで、たばこの吸い殻だのコーヒークップの飲み残しだのが好き放題に置かれてる机を、誰かが片づけなければ綺麗にならないのは必然で、たまたま当番だったわたくしこと笹原可奈は、たまたま手の空いていた同じ経理部の新人君を連れ出して片付けの極意を伝授しているわけだが、くどいようだがそんなに広くもない会議室なのに新人君の手と私の手が何故かよく当たる。すると、横にいてカップを受け取ってくれているはずの新人君の声が、背後から、細かく言うなら耳元から聞こえてくる。

『田中もさあ、口ばかりなのやめりゃいいのにさあ。社長のゴマスリばっか、アホか』

あの、その田中さんは、今皆に聞こえるようなため息については終わったばかりの会議の愚痴をねちねちと課長に言い連ねている田中経理部長のことでしょうか、新人の中村君。しかも、そんな口調の愚痴を聞くほどの間柄だったでしょうか、私たち。

「あ、それも僕が持つていきますよ」

今度は丁寧な口調になった中村君の声は横から聞こえてきた。集めたたばこの吸い殻をカートに載せていると、また不意に手が当たる。ちよつと、一々近づきじゃないか？しかもどうしてカートに載せるタイミングがこうも合うんだ。

『つぱり笹原先輩つて彼氏いるように見えないけど、案外こういうタイプが遊んでたりしてな。眼鏡取つたらかわいとかだったら超ウケるのにな。でも黒髪なのに眼鏡萌えする感じの顔じゃないしなあ。あータバコ吸いて早く終わ』

くだけた口調の中村君の声はまた突然後ろから聞こえてきて、文章の途中で切れる。人に話をするならきちんと最後まで言ったほうがいいと思いますよ。といつてもそれは彼のせいではないか。

彼氏がいないのは当たってますが、遊んではいません。眼鏡萌えの件は少し同意します、私もこの黒髪染めようかと最近考えてます。ついでに肩まで伸びてきた髪ももう少し短くしようつと。あと眼鏡を取つたら人の顔も自分の顔もよく見えませんし、コンタクトは嫌いです。普通の顔だと26年思つて生きていますが、何か。

「ありがとう。あ、最後テーブル拭いて配置変えとくから、中村君はカートを持って戻つてもらつていいですか」

「はい、分かりました」

「タバコは喫煙室でね」

「あ、はい」

不思議そうな顔をした中村君が、カートを転がしながら会議室から出ていった。

はあ、と深いため息が出る。力が抜けて、机から飛び出していた椅子に少しよろめきながら腰かけた。新人君との5分程の片付け作業は他の仕事より楽な仕事のはずなのに、かなり疲れた。頭、痛い。人の気持ちが分かったらいいのにと思う人に教えてあげたい。

朝から何か変だなあと思っていたけれど、この5分程の試験時間で解答を出した。

正解は、私は素肌が接触すると相手の思考を読み取る事ができるようになりました、マル。ちょっと動揺しています。

体験してみて、気持ちが分かるのはイイモンダヨとは言えない。

気の所為だと思いたかったけれど、どう足掻いてもこの結論に至る。新人君、ご協力に感謝する。人の気持ちが分かると言っても、未来や過去が分かるという感じではなくて、処理しきれない感情も入って来ているような、とにかく言いようのない感じでちょっと気持ち悪い。何だろう、酔う。

特にその時強く思ってる思考が、話しかけられてるみたいに耳元で聞こえてくるには参る。ちょっとくすぐったくて笑える。いやもちろん驚いてるけどさ。

それにしても新人君はあんなこと考えてるんだなあ。私が新人の頃はとうだったんだろう。

まだ5月も半ば。もう少し職場に慣れてから部長の事を判断しても遅くはないのではなからうか。まあ部長が口ばかりのところは認めるけど、動くところはきっちり押さえてるし、営業部の人たちとやり合ってくれてるんだからさ、長い目で見てやってよ。

って、この思考が逆に伝わってくれればいいのに。

どうしてこんなことになったんだらうか。またため息が出て、額を軽く中指で叩く。

朝、母さんの愚痴が聞こえてきたのが始まりだった。まあいつも口に出してることに似てたけど、ちょっと毒入ってた。父さん、早めにフォローしてください。あれはまずいです。ということ今朝から聞こえてきているのは間違いない。

昨夜はどうだったかな。普通に仕事を終えて電車で三駅乗って家に着いて、夕飯は何だったか忘れた。食べ終わってビール飲んでから食器と一緒に弁当箱も洗って、お風呂に入って、私が最後だったから掃除もした。んで、ちょっと太り気味のトラ縞タロウ君をいつものように足でフミフミしてゴロゴロ鳴かせて、こないだ友人から借りた写真集を見て、営業部の同期から来てた合コンお誘いメールに断りを入れて、お休み三秒で寝たはず。

誰の声も聞こえてこない、いつもと同じ一日だった。

うーん、何故だ。

「笹原あ、どした？片付け終わったんでしょ」

いつものように私を呼ぶ少し間延びした声が、会議室に響く。

同じ経理部で同期の永瀬が会議室の入口に立っていた。

日本人女性の平均身長より少し高めの彼女を見上げて少しぼうっとする。同じ制服を着ているはずなのに違う制服に見えるから不思議だ。永瀬は焦げ茶のロングヘアを仕事中は一つにまとめていて、今はいかにも仕事ができる人という風貌だけど、まとめていても下ろしていても美人には変わりはない。はあ、スタイルいい人っいいよね。私の身長もせめて平均位あればいいのに生憎と153センチと少ししかなくて、制服は子供の正装のように見えて何だか残念な感じだ。

「中村君にカートを戻してもらってるところ。あとはわたしの座ってるこの椅子をきちんと元に戻したら終わり」

でも片づけは終わっても、気持ちの整理がまだつきません。

「今日のランチさあ、社食でうどん食べたいんだけど」

「私もさっぱりなのが食べたい。ねえ永瀬圭子さん」

「何」

「人の気持ちが分かったら嬉しいですか？」

私の突然の質問に、永瀬の気合の入ったアイライナーとマスカラで飾った目が数度忙しなく瞬きする。

「笹原あ、呑気なあんたが今何考えてるのか私には分かんないし、分かりたくもないけど」

「そうですね、そうですね」

キツパリサツパリな永瀬に聞いた私がちょっと間違ってた。すみませんでした！

そつと椅子を元に戻して会議室のドアを丁寧に閉めて、永瀬から半眼の視線を送られても気付かないふりをしながら適度な身体的距離を保ちつつ、ランチに向かった。

永瀬の発言はただでさえ怖いのに、万が一手が触れて本音をダイレクトに聞かされたら泣くかも。

いや、きつと泣く。

第2話

「それで、人の感情に疎い笹原が、人の気持ちを気にするような何かがあったわけ？」

社員でそこそこにぎわう社員食堂でお目当ての冷やしうどんを食べ終わった後、永瀬の追及が来た。いや、もうね、私の中の流行りが過ぎましたからいいですよ。

「笹原あ」

「はい」

「さつきから挙動不審。まああんたは時々変な行動するけど」

だって、うちの社員食堂は席と席の間がちょっと狭いんだよ。私の席の後ろを通ろうとする社員たちがぶつかって来る度冷や冷やして、机に体とイスを極力密着させながら食べたけど、苦しい。

でも直接肌に当たらなければ人の思考は流れてこないという法則は間違っていないようだ。それでも万が一に備えてこうして陰ながらひとさまの考えを読まないように努力しているというのに、疎いとはどういうことだ！

ちよつと睨んでみるけど、目力ばつちりな永瀬の笑みで返される。勝てるわけがない。勝つつもりもなかったりするけど。

「いや、あのですね、人の気持ち分からないから相手のことを考えるのであってですね、何でも分かってしまったら、相手の事を考えなくなるといことになるわけですからそんなじゃ人生面白くないですよね、ということをごです」

「面白くないわよ。笹原以外はね」

「は。何で私以外」

「あんだ人の気持ちに疎いから」

「だからどこが」

「それを聞いてるようじゃ、人の気持ちを分かったってことにはならないわよ」

うん、訳が分からない会話ですね。永瀬の意図するところが読めません。ああ、これが人の気持ちが分からないということですね。そっかー。

「笹原が私の気持ちが読めないのはもう分かってるから。で、誰の気持ちを気にしたの」

「誰って、誰も」

「あんだねえ」

「ここ、いいか？」

呆れた永瀬の声と同時に、私の横の空いていた席に不意に人影ができた。

日本人男性の平均身長は幾つか分からないけど、きつと180センチはあるであろう高身長企画部に所属する高坂治樹が座ってきた。おお、ナイスタイミング。

「どうぞどうぞ」

「もう食べ終わったのか」

「企画部と違って経理部はきっちり昼食時間が取れますから。今日も残業になりそう？」

「そうだな」

高坂は綺麗な空色のネクタイを左手で少しゆるめながら、持ってきた定食に手を付け始める。その定食大盛りだよね。やっぱり男子はがつつり食べますね。あ、そのカツ、一口欲しい。

「ちょっと笹原。あんた逃げてんじやないわよ」

「もう、その話はいいですっ。どうせ私には人の気持ちなんて分かんないってことでいいから」

「何の話だ」

ああ、もう！三十六計逃げるが勝ち。トレイを持って立ち上がるうとしたけど、高坂に右手の手首を取られた。

「笹原」 『笹原』

わあ、高坂の声が二重に聞こえてくる。慌ててトレイから手を離しつつ高坂の手を振り払う。やーめーてー！

『気に』

「だから誰の事も気にしてないから。ちょっとそういう本を読んでね、人の気持ちが手に取るように分かったら、嬉しいもんなのかなって考えただけで、特定の誰とかそういうんじゃないから」

聞こえてこようとする声を脳から振り払うように適当思いついたでっち上げ話を一気にまくし立てる。真実も少し混じってるけど。

第一誰の事を考えるというんだ。今私が考えてるのは、自分自身の事で、私が人の気持ちを全部分かつちやうのをどうしたらいいのかって事で、ていうか、そんなこと話したら、私病院行きか？うっ、何でこんなことに。

わあ、うどんの残りつゆをこぼしちゃったじゃないかー！

「高坂っ、ごめん！袖が、シミが袖に！背広が」

「落ち着け」 『落ち着け』

ハンカチで袖を拭こうとして思わず高坂の手を取ってしまったて、慌ててまた手を離す。

高坂の低めの声が耳元で聞こえるのは中々無い経験だな。録音できるものなら企画部の女子に聞かせてやりたい。売れるかな。

「笹原あ、あんた何で耳押さえてんの」

「いえっ、これは何でもありません！というか高坂、悪いけど背広脱いで。シミにならないうちに落とすから」

「じゃあ頼む」

「ごめん、シミ抜きしたら後で企画部持っていくから」

「いや、帰りにいつものコーヒーストップで受け取る」

「は？だって高坂、今日も残業だって」

「ない」

「は？だって」

「笹原、休憩終わる前にそれやるんですよ。時間ないよ」

「わあ、そうだ！じゃあまた後で！」

永瀬の促す声に今日の仕事の多さを思い出した。私も残業にならないように伝票入力を終わらせなきゃまずい。背広を持って狭い食堂を後にするとき、永瀬の「明日のB定食ね」という声と高坂が同意する音が聞こえた気がした。

第3話

終業予定時間を五分経過。

やっぱりこの量は無理だったか。今日入力を回さなきゃいけない書類が片付けられずにいると、永瀬が私の分の書類を奪っていった。

「ほら、高坂に返すんでしょ、背広」

「え。企画部が残業ないなんて、本気？」

「笹原がその背広汚したんでしょ。コーヒーくらい奢ってやんなさいよ」

「まあそうだけど」

「早く行きなさい」『決着つけばいいけど』

「え？ 何の決着？」

永瀬がきよとんとした顔で私を見た。まずい。永瀬が人差し指で私の額を押しながら言ったセリフに思わず反応したけど、今のは口に出してない方だったか。あわわ。口元なんて見てないし。

「あ、じゃあ永瀬ごめん、頼むね」

永瀬の反応を見ずに部屋を出て、更衣室に駆け込んだ。

終業直後の更衣室はいつものように混んでいて、皆この後の予定や今日の仕事の愚痴を語り合う、女の園って感じた。でも今日の私に参戦している余裕はない。

「ちよつと笹原くほんとに今回も合コン来れないの？今回は人数欲しいんだけど」

着替えてる最中に昨日のメール相手である同期の岡井ちゃんに腕

を突かれる。今度の男子は草食系が多いらしいとか次こそはとかあの鈴木を押さえないととか、彼女の思考が一気に流れ込んでくる。

ちよつと服、服を先に着させて〜！

「ごめん。やっぱりそういつのつて場が読めないというか、人の気持ちを読めないというか」

「あんた気にし過ぎ〜ただご飯食べるだけなんだからさあ」

うん、いやそうなんだけど、でもせつかくおいしいもの食べるなら気安い雰囲気知ってる人たちと食べたほうが消化しやすいというか、楽というか。

あ！

「やっぱり今回行く」

「え、ホント！？ じゃあ時間と場所が決まったらメールする！」

「うん、よろしく。あ、悪いけどメンバーに永瀬も入れといて。ごめん今日ちよつと急ぐからまたね、お疲れっ」

そうだよ、人の気持ちに疎いと永瀬に言われたんだから、疎くないところを見せてやればいいんじゃない。

今の私には妙な能力があるんだし。長い間触れると気持ち悪くなるけど、ちよろつと触れば少しは分かるんだから。うまく使えばいいのかも。わー、人の気持ち分かるって嬉しいところ、あるじゃない！私に一目置かせてみせるぞー！

入社してから一度か二度、連れられて行った以来断りまくっていた合コン、個人的な趣旨は違うけど楽しみに思えてきた。

そんなことを考えながら待ち合わせの店に行くと、既に高坂が来ていた。企画部、仕事ほつたらかして大丈夫か。ていうか、そんなに大事だったのか！ この背広！

「ごめん、お待たせ。というかコーヒー奢ったのに。そんなに早く仕事終わらせてくるほどお気に入りだったんだね、この背広。ほん
とごめん」

「いや」

既に注文し終えて席に着いていた高坂に声をかけてから、いつもの
のコーヒーを注文してカウンターの横で出来上がりを待つ。

ふと、高坂に視線を向けると、ちよつと顔が嬉しそうだ。大体無
表情に近い彼の表情の変化はあまりよく分からないけど、多分あれ
は嬉しい顔だ。

高坂とは入社オリエンテーションで同じグループになったのが始
まりで、そのグループのメンバーとは結構意気投合した。入社後そ
れぞれ希望の部に分かれたけれど、4年たった今でもその時のメン
バーとは部を越えて時々飲みに行く。

高坂はちよつと取っつきにくいタイプに見えるけど、飲んで潰れ
た男どもや何か困った仕事を抱えた同期の愚痴話に付き合っていて、
仲良くなれば案外面倒見のいい男だと思う。確かにあまり表情が豊
かでないから取っつきにくく思える人だけど、いつだったか社内コ
ンペで勝ったことを話してくれた時、少し表情が変化するのを見た
ことがある。多分それに近い顔だから、嬉しいということだろう。
珍しい。

よし、気分よさそうのうちにもう一度背広のシミが取れなかった
ことを謝罪しないと。

「高坂、何かいいことあったの？ 珍しく顔が緩んでるよ」

「それはお前だろ」

「は？」

「さっき、入ってきたとき」

「ああ、あれはね合コン行くことになったから、ちよつとね。それ

より背広さ」

うを。一瞬の間に洗った顔になってますけど。その眉間の深い皺、
いつの間に作ったの。

背広は弁償決定か!?

「笹原、合コン行くのか」

「うん、ちょっと。あのさ、高坂背広なんだけどね」

「何で」

「いや、何でって」

「気になるやつでも来るのか」

は？ 昼の続きか？ ていうか高坂あの時間いてたでしょ。

「いや全然」

「じゃあ何で」

何だか雲行きが怪しい。というか、事情を説明したら、私の今の
状況が高坂にバレるでしょ。

「あ、あのさ、袖のシミ取れなかったから、これ弁償させて。これ
幾ら位した？ 気に入ってた？」

「気に入ってた」

「そ、そっか」

高坂の選ぶ背広の値段の高さを考えたら、ちょっとお金が飛んで
いく景色が見えて、思わず両手でコーヒーマグのキャップを持った。その
瞬間、高坂にまた手首を掴まれる。

「笹原」「笹原、お前何考えてるんだ、合コンなんて今まで気にし

たことなかつただろ』

「わ、ちよつと待って！ 手を」

『永瀬がどれだけガードしてたと思ってるんだ。第一、誰も気になる奴いないって言っ』

「高坂、離して！ 永瀬が何をガードすんの！」

一気に流れ込んでこようとする言いようのない感情の波に耐えられなくて勢いよく高坂の手を外したら、またカップを倒して、コーヒーが床にこぼれた。

ああもう！ まだ熱かったからちよつとしか飲んでないのに！

店員さんが大丈夫ですかと駆け寄って来て、さつとコーヒーを片づけてくれた。さすがサービス業、接客態度いいね。ごめんね、ありがとう。さよなら私のコーヒー。

私があたふたと店員さんに対応している間も、高坂はピクリともせず、私に振り払われた自分の手を見ていた。

こんだけ騒いでるのに相変わらず冷静だね、君は。

「笹原」

「ごめん、今日何かよくこぼす日だね。高坂、火傷してないよね」

「俺、口に出して言ってたか？」

「え」

「永瀬のこと」

あ。さっきの言っていない方だったか！ ええと、ええと、口に出してた方は何て言ってたっけ。

「う、うん。言ってた言ってた！ そいで今日は有川部長からの残業を後輩の子に押し付けてきたんだよね」

確かそんなことを。

「俺は言っていない」

うん。間違えた。

第4話

出るぞ、と言われ、店を後にする。えーと、これで解散でいいですか。

「これからどうやって接触しないようにするんだ」

「長袖着て、手袋、します」

「そうしろ」

「でも暑いんですけど」

じろりと無表情で目線だけ向けられる。はい、頑張ります。

あれからコーヒートをこぼした後のオウンゴールによる余波は立て直す事が出来ず、ていうか高坂の追及はかわせなくて、今朝からの出来事を話させられた。

高坂の無言の圧力はちよっと耐えられない。

「……さっきの」

「忘れます！ もう覚えてません！」

「何を」

「えっと、永瀬がガードする云々のことと、後輩に残業を押し付けたこと」

「他は」

「だから、一瞬だからよく分かんないの。その時強烈に考えてたことだけはつきり聞こえてくる感じなんだから。聞こえちゃったのは不可抗力だったんだし、ホントごめんてば。今度奢るし背広も弁償するし」

まだ信じてもらえないようだ。背の高い高坂から目を細めて見られたら、威圧感ありまくりですから。

「案外くだいなあ、高坂つて。そんなに知られたら困る企画でも立てたの？　そもそも企画らしいこと考えてなかった感じだったよ。仕事してんの」

第一私が知っても企画立案なんてできないから。情報漏えいしないよ。

ちよつと呆れ顔をした高坂が、深いため息をつきながら首の後ろを搔く。

「このこと、俺以外に言うなよ」

「言えないよ。だから高坂も触らないでね」

「その語弊がある言い方はやめろ」

どうなることかと思ったけど、バレたのが高坂で良かった。

私の説明を聞いている時、冷静に状況を把握しようとしてくれたし、気が狂ったとも気持ち悪いとも言われなかった。考えてみれば私だってこうなりたくてなったわけじゃない。それに突然こうなったのなら明日にも治るかもしれないし。

高坂に聞いてもらえたことで少し気が軽くなって、駅への道を並んで歩いた。

歩いている時も、駅に着いて電車に乗り込んだ時も、高坂は他の人と私の間に入って何かと気を回してくれた。気遣い、というのは分かるけど。けれども。

「朝も普通に来たけど、大丈夫だったよ。案外当たらないもんだから」

人に当たりやすい両手には高坂の背広を引っ掛けてあるから、高坂が目の前に立っていて触れても何も聞こえてこない。でも一応当

たらないように気を付けてますから、そんな眉間に皺をよせなくても大丈夫だって。

自分の降りる駅に着いて、じゃあここで、と言おうとしたら、高坂まで一緒に降りた。何故。

「高坂、同じ駅だったっけ」

「いいから、歩け」

もしかして家まで送るつもりか。さすがにそれは私も接触しなくたって読めたぞ。

「家まで徒歩3分だから、いいって」

また無表情の視線。お嬢さま扱いするなら、もっといい表情してくれ。高坂の顔、整ってるから社内でも評判いいぞ、無表情でなければ。

結局、家の近くまで送ってくれたけど、家の目の前までは本気で辞退した。家族に見られても説明のしようがない。はっきり言っ、いい迷惑だ。

「背広にしても何にしても、今日はほんとごめん。今度何か奢るか」

夕暮れ時の少し暗くなった道路で、高坂を見上げる。街灯の光を背にした高坂の表情はいまいちよく見えない。でも駅から無言だった高坂が不意に手を伸ばしてきて、私の頬に少し触れる。ちよつと！

『明日の朝7時15分、駅の入口。おやすみ』

「お、おやすみ」

両手は背広で覆っていたから振り払う間もなかったけど、高坂の指はすぐ離れた。他に何も聞こえてこなかった。

すごいな、そんな連絡事項しか考えてなかったのか。

高坂つて、ホント何考えてるか分かんない。おやすみ位、口に出して言えばいいのに。

* * *

案外、日々と接触せずに過ごしているものだなと、一週間ほど経過した今日、思う。

子供じゃないんだから、手なんか誰とも繋がらないし（繋ぐ彼氏も無し）、気安く人を触る趣味もないし（逆セクハラか）、触ってくる人なんてもつといない（朝の電車は少し混雑するけど高坂がいるから痴漢にも遭わない。ラッキー）。

週末は家にいる理由ができたから、のんびり借りたままの写真集を見ながらタロウ君に癒されて（タロウ君を触っていたら何だか異様にお腹がすいた気分になって、お菓子を食べ過ぎたのは何故だろう）、ぐだぐだと健全な土日を過ごさせてもらった。

だから数日経つてもう大丈夫だと思っていたのに、高坂は毎朝私に乗る駅で待っている。手袋しているかとか、人の思考読んで酔わないかとかのチェックのようだ。

メールで言えばいいのに一々うちの駅で降りるの、面倒くさくないか？

それに駅から職場までの道中でも特に会話はない。でもまあ、そんな無言の時間にはこの一週間で慣れた気がする。無口な高坂が隣を歩いていても鼻歌だって歌えるさ。

「笹原」

静けさを破って私を呼ぶ声に、鼻歌を歌いながらふんふんと頷いて次の言葉を待つけど、一向に聞こえてこない。

高坂は考えながら話すのか、次の言葉を言うまでに間があく。でも今日はちよつと間が長すぎじゃない？ 見上げると高坂と目が合った。

この顔は、ちよつと怒ってるのか？

「昨日、何で先に帰ったんだ」

「お腹すいたから」

「メール送っただろ」

「一時間も待てませんで。昨日は夕飯ハンバーグだってお母さんから聞いてたんだよ？無理無理」

昨日は高坂が残業で、一時間待てとメールが来ていたけど、子供じゃないんだからと無視して先に帰ったんだ。確かに今の私の状況は厄介なことになっているけど、自分が防衛していれば接触しないで済む。何とかなってるし。

ならば、社会人にもなって送り迎えしてもらう理由なんかないだろう。

「大丈夫だったのか」

「何にもなかったよ」

「まだ聞こえるのか」

「うん」

「何で分かる」

「さつき出口で定期落とした時、拾ってくれた学生さんが、試験はウツだって言ってた」

あ。高坂の眉間に皺が寄る。

「大丈夫じゃないだろ。何で手袋外してるんだ」

「定期出す時邪魔だったの。もうさあ、高坂、心配し過ぎ。大体分かったから、もう送り迎えしなくてもいいよ。高坂、残業できないんじゃ仕事にならないでしょ」

そう話すとちょうど永瀬が職場の入口に入っていくところが見えたので、じゃあねと高坂に告げて永瀬に駆け寄った。

「永瀬、今度の木曜夕方空いてるよね」

「空いてないわよ」

「キャンセルになったって知ってる」

「……それで、何」

「その居酒屋で合コン入ってるからよろしくね」

「はあ?!」

言いきつておねだりするように全開の笑顔を作って永瀬を見ると、綺麗に化粧をした目を見開いて、若干眉間に皺ができていた。

だめだよ朝からそんな表情、皺が寄るよ。でも、美人は美人のままだな。羨ましい。

そんな表情に見惚れそうになるけどここで捕まって怒られるのは嫌だから、永瀬の元からも走って逃げだした。

ちょっと高坂、あんたどうなってるの!? と永瀬の問いたただす声の後ろから聞こえたけど、気にせず更衣室に駆け込んだ。

第5話

逃げたとしても同じ職場、同じ部署所属の永瀬の追及から逃れられるわけもなく、今回の合コンはすごいんだから、一緒に来ないと見逃すよ！ と必死に誘ったら、まあいいわよ、と案外呆気なく許可を戴けた。

もっと色々難癖付けられるかと思ったけど、よかった。

結局この日も高坂は残業だったけど、私も残業だったので帰りの時間は同じになってしまい、仕方なくまた送ってもらった。にしても、わざわざ送ってくれるならもっと気持ち良い態度してよね、無表情極まりない。

二日後の木曜日、合コン当日。

今日の服は七分袖と長袖カーディガンのアンサンブルで、いざというときにさり気なく当たって気持ちを読む気は満々だ。それに合コンに来る人間なんて皆飲んで飲んで、きつとぐだぐだになるんだろっつから、少しぐらい接触しても分からないだろう。腕か指をちよるつと、ちよろつとね。

朝の迎えもいらないと断ったのにまた駅で待っていた高坂の顔は怖かったけど、朝会った永瀬の顔もとっても素敵な笑顔で、恐ろしかった。

「今日、つままないことになったら、ランチじゃ済まないわよ笹原あ」

はい！ 頑張ります！

ミスった時にたかられるであろう永瀬好みのディナーは高額過ぎる。しかし今日の勝負は既についている。バシバシ触って読みまくって、永瀬に一目置かせてやるー！

月締めの仕事も残業になったけど何とか終わらせて、凍るような目力の永瀬を尻目に、戦場となる居酒屋に移動した。既に仕事を終えた合コンメンバーたちは揃っているようだ。

企画立案の同期が揃えた、社内営業部の女子たちと企画部の男子達。年齢も上下入り乱れだな。顔は見たことがあっても、話したことのない人が何人か……。

「こ、高坂!？」

何故高坂がここに。あんたあんなに私が合コン行くことに反対して威圧してきたくせに、自分は何なのさ。

「あー、やつとききたー! はい、注目。わたくし岡井は今回頑張らせていただきました。滅多にこない高坂に続いて、こちらも滅多にこない経理部の笹原と、噂の永瀬ちゃんです、どうぞー!」
「うおー! マジで岡井すげー! 永瀬さん、ここ、ここどうぞどつぞど」

「生中2つ入れて〜!」

「ちよつと席替えしろよ、席替え」

「まだ始まったばかりでしょ〜!」

テンション高めの声の幹事岡井を筆頭に、悲喜交々入り乱れた声が聞こえてくる。

永瀬つてやつぱり噂の人なんだねえ。永瀬つてあんまりプライベート話さないし、終業後も付き合い悪いし。

そんな注目を浴びている永瀬は、私には見せない営業顔で私の座る位置を指定し、自分はその横に座ってサクサクと食べ物注文し始めていた。

私の隣はえつと、誰だ。

「どうもー企画部の伊東です。笹原さんは高坂と同期なんだよねー？ 僕はこいつの2コ上です。こいつ無口なのに、同期仲間によく食べに行ってるみたいだねー、楽しいー？」

「あ、はい。でも無口ってほどではないかと」

「いやいや、このレベルは無口でしょー。はい生中来たよーどうぞー」

皆さん開始一時間でもう出来上がっているのか、テンションを無理やり上げているのか、会話に何と言うか勢いがある。へー、久しぶりの合コンだけど、こんなんだったか。

参加人数が妙に多いから、合コンというより何かの打ち上げを兼ねているようだ。

偶然隣になつた伊東さんのテーブル向かいに高坂がいるけど、両脇を熱心に話しかける女子に固められていても黙々と目の前の料理を片づけている。

おいおい、合コンは座談会だよ、確か。談話しなさいよ、談話。

「笹原さんはビール好きなのー？」

「まあまあでしょうか」

「じゃあ次何にしようか、僕これオススメー」

「あ、まだ大丈」

言い終わる前に、何だかよく分からないネーミングのお酒を注文される。そんな次々頼まれても、飲めませんけど。

でも、チャーンズ！ 伊東さんが頼んだ料理が来て、それにつけるドレッシングが私の前方にある。取って上げますよ、渡してあげますよー！

うきうきとドレッシングのボトルに手を伸ばした瞬間、高坂の手がドレッシングをさらって行き、ついでに少し指が当たった。

『何考えてるのかわらんが、伊東はやめとけ』

ちょっと！ いいタイミングだったのに邪魔しないように。というか、何で伊東さんの気持ちを読もうとしたか高坂は分かるんだ。腹が立って睨むけど、高坂は素知らぬふりしてドレッシングを伊東さんに手渡した。

「お、高坂、よく見てるな。ね、チカちゃんにサエコちゃん、こいつ面倒見いいでしょー」

「高坂さんって気配り上手ですね。わたし見習いたいな」

「あ、高坂さんこれ食べ終わっちゃいましたねえ、次何にしますか
あ」

どっちがチカちゃんでサエコちゃんかわからないけど、両脇の女子にお世話してもらっとけ。私には私の勝負があるんだ。

はっ！ 永瀬は何をしてるんだ。ばつちり私の勇姿を見てもらわねばならぬというのに。

ビールを飲みながらちらりと永瀬の様子を見ると、永瀬の向こう隣の男子やテーブル向かいの男子たちの質問をかわしつつも相手の情報を引き出している。

ダメだ、この男子達は既に負けている。これではもうじき永瀬が飽きてしまうじゃないか、開始一時間は持つてくれ！

そう思った時、暑くなってきたのか隣の伊東さんがシャツを腕まくりし始める。

再びチャームス、私もカーディガンを脱いで、今度こそさりげなく読んでみせる！

「笹原さんって、色白いねー」

「事務処理で室内にすることが多いので」

「休みの日とか何してるの。ちいさいから外でスポーツするタイプには見えないけどー」

「背は関係ないですよ。でもあまり運動は得意ではないですけど。ボーリング位でしょうか」

「えー、じゃあ今度行こうよー。僕も結構好きなんだーボーリング」

「あ、じゃあ今度高坂から連絡入れさせますね」

「そうじゃなくて、二人で対戦しようよー」

「そうですね？ 団体戦の方が盛り上がりますよ。交代しながらだから体力も温存できますし」

「ゆっくり個人戦もいいもんだよー今度メールするよ、携帯貸してー」

来た！ よし、渡す時にちよつとだけ接触できれば。携帯を取り出そうと上半身を擦って後ろに置いていた鞆を取ろうとしたとき、ガチャガチャと音がした。

「おい高坂っ、お前何やってんだよー！」

「悪い、酔って手が当たった」

「酔ったって、お前なー」

ビールのコップが倒れてテーブルの上が液体だらけになって、伊東さんのお皿やお酒の方にまで流れてきていた。ついでに伊東さんの手も何故だか濡れている。

わあ、そのまま動いたら私のお気に入りのスカートまで汚れます、勘弁して。

慌てて布巾を伊東さんの手に当てながら、周辺を片づけようとしたら。

『んだよ、高坂のやつ、笹原ちゃんと俺の邪魔してんのか、このやるー。あとちよつと。この髪触ってキスしたい。かわいい。この後

どうしようか。他の奴もつまく』

知らず触れていた腕のおかげで、耳元から上ってくるように聞こえてきた声に、ぞわりと鳥肌が立つ。はっきりと聞こえてこない声以外にも何かが聞こえるけど、体中にかつてない嫌悪感と気持ち悪さが一瞬にして巡った。眩暈がする。

「ちょっと、笹原？」『もう酔ったのあんた！？ 馬鹿ね、こんなくだらない所来てまで何したかったの、倒れに来たわけ？ あたしは介抱しないわよ。まったくこの男どもときたら』

イライラしているような呆れたような永瀬の声が聞こえる。ああ、やっぱり怒ってる、一時間も持たなかったな。気持ち悪くて目が開けられない。

『笹原ちゃん、俺が』

『から、やめとけって言っただろ。大体俺が来てるの分かった時点で、もつと思考を働かせる』

「うん、ごめん」

むかむかする気持ちの中、高坂の声がいやに気持ち良く聞こえてきた。そこで私の意識は途切れた。

第6話

携帯の目覚ましアラームが鳴る。

いつものように止めて、いつものように支度をして、いつもの時間に自分の部屋を出た。リビングに入るといい匂いがしてくる。お母さん、いつもありがとう。

「おはよー。今朝はパンにする。」

「おはよう。可奈、二日酔いは大丈夫なの？まったく、意識が無くなるまで飲んで。圭子ちゃんと高坂さんて彼にお礼をきちんとなさいよ。」

はて。二日酔い。別に頭痛はしないし吐き気もない。昨日の夜は、普通に帰ってきたはず。普通に……。

「お母さん！ 私どうやって帰ってきたの!？」

「圭子ちゃんと青年が送って来てくれたわよ。本当に記憶がないのね、呆れた。可奈のメイク落としたの私よ。ぐずぐず言ってたから気付いてるかと思ったのに。」

お母さんの呆れた声が台所から聞こえてくる。呆れた。ホントに自分に呆れた。

手を額に当てて茫然とする。全然記憶がない。ビール飲んで、ビールこぼされて、それでどうなったんだっけ。

ふと時計を見ると出勤時間が近づいていた。慌てて朝食を食べてお弁当を適当詰めて家を出た。家まで送ってくれたと言う高坂と合わせる顔はないから一つ早い電車に乗ってしまおう。朝一番で説教は嫌だ。

そんな願いも空しく、駅に着くと、恐らく怒っているであろう無

表情の高坂がいた。

早い、早過ぎる。目の前を通り過ぎて改札口に入ってしまったけれど、高い位置からの視線と薄眼だけれど確実にわたしを射ている目力が怖くて進めない。

お前何先行こうとしてるんだ、と言わんばかりだ。やばい、火に油だったか。

「あー。あ、あ、あーあの、昨夜は何だか大変ご迷惑をおかけしたように……」

「……反省しているのか」

「ええと、記憶がないので反省のしようもないというか」

「記憶がないことを反省しろ」

「ごもっともでございます」

「そんな状態のお前があんなところに出て何がしたかったんだ」

そんな、とは人の気持ちを読める状況の私がつてことですよね。

うう、ただ永瀬の鼻を明かしたかったなんて言ったらもつと怒られるだろうな。誤魔化しとこう。

「いえ、ちよつと諸事情で」

「もつやるなよ」

高坂にしたらただでさえ背の低いわたしと視線を合わせるのは大変だろうけれど、上を向く気力も沸いてこないのもそのまま俯きながら言葉を交わす。もう一度隠れてやってみようという案が頭の隅を掠めたけど、かつてない高坂の威圧感には、はい、以外の返事は出てこない。

「昨夜の一件につきましては、お詫びのしようもなく……」

「詫びはそれでいい」

それ、とは。顔を上げると私の手元に視線が送られている。もしや。

「今日のお弁当、冷凍物が多いけど」

「いい」

「高坂には足りないと思うよ」

それでもいいということなのか、高坂の長い手が私の手からひよいとお弁当の袋を奪って改札口に向かう。追いかけて高坂の表情を読もうと見上げたけど、高坂は何も言わなかった。お弁当代とタクシー代を比較しても、タクシー代の方が高いので、お詫びにならない気がするのですが。

そして予期していた通り、職場に着いてすぐ、永瀬に人気のない会議室に呼び出されてこっぴどく叱られて、嫌な汗をかいた。しかも最低一週間の会社外ランチは奢りとの通達。いやいや、だったら普通にタクシー代をお支払いさせていただいた方が、と思うけど永瀬の目力の前には当然のことながら言いだせません。はい、奢らせていただきます。

でも汗の量が一番多かったのは、昼休憩のときだった。

仕事が片付かず、本日の会社外ランチ奢りの刑は免れ、食堂に永瀬と入ると、妙な視線が一気に集まる。居心地悪……。

そう感じている事を知ってか、永瀬が座りながら綺麗に微笑んだ。傍から見れば眼福の笑顔だが、私には永瀬の背後に黒いものが見える。怖い……。

「あれだけ目立つことすればこうなるわよ」

「え、何、私何もしてない」

「笹原が倒れた後の高坂は王子様張りだったわよお」

何、何したの！ ひそひそと永瀬に問いただしても、知らぬ存ぜぬを突き通される。ちよつとー、今日の定食代払ってるでしょー、友達甲斐の無いことしないでよ。特に女子からの視線が痛いんですけど！

周りの反応にビクビクしながら一番安いうどんをすすっていると、岡井ちゃんが食堂に来たので、小さく手招きしてさり気なく聞こうとしたんだけど。

「やほー。これまで笹原が合コンに来なかった理由はそういうわけだったんだねー」

岡井ちゃん、声が大きいです。というかどうかというわけですか。

彼女がトレイを持って私の隣に座ると同時に、高坂が食堂の入口にやってきたのが見えた。

ちよつと、まさかあげたお弁当こんな公衆の面前で食べる訳？冷凍弁当を皆に見せて私を貶めようという魂胆か！ 昨日の私はそんな最低人間だったのか！？ だったら、そうと朝はつきり言ってくれ。

「ねえ、昨日私さ」

「高坂と付き合ってるならそう言えばいいのに」
「は」

岡井ちゃんの突然の台詞に言葉が出ない。ゆっくり瞬きして箸を落としそうになったとき、永瀬が割って入る。

「笹原は、付き合っていないわよ」

永瀬に、岡井声量を落しなさい、と小さく命令されると、素直に

岡井ちゃんは大きな声を落として、何故か姿勢も低くしながら更に話を続ける。

「えー、でもあれだけの扱いしてるなら高坂の方はそうでしょ」

「本人が言っていないのに周りが先に言っちゃ高坂がかわいそうですよ」

「あらー、笹原疎いもんねー。高坂、ご愁傷様」

「何、何の話なわけ」

「……ここまで言ってる分からない疎さは、愚かの何物でもないわよ。耳があつて聞いているんだから自分でじっくり考えなさい」

永瀬に突き離されて、仕方なくうどんのつゆを静かにすすりながら今までの言葉をまとめてみる。こういうの考えるの苦手なんだけど。

えーと。だから高坂が王子様っていうのは分かるとして、目立つ何かをしたと。で私が高坂と付き合っている、でも高坂がかわいそう、で私が疎いと。ううむ。

「昨日家まで送ってくれたのが王子様って事？ でも永瀬も一緒だったじゃん。三人で帰ったんだから付き合ってるのは誤解でしょ。」

酔って意識不明になった私を送らなきゃいけなくなった高坂がかわいそうなのは分かるけど、朝お礼とお詫びしたから謝辞に疎い人間ではないと思いますが、何か」

「どこをどうしてそういう方向に行くのかあんたの頭の中を見たいわよ」

永瀬の馬鹿にしたような言葉にカチンときて、永瀬が付き合ってる彼氏の話をごこでばらしてやるうかと思うけど、報復の炎と化した永瀬とこの後一緒に仕事をする自信が無いので我慢して小さい声で言ってる。後で、トイレで。

とにかく現状の私と高坂は居心地悪いほど注目を浴びているので、
早々に食堂を後にした。

第7話

「笹原さん、ちょっと話を聞きたいんだけど……」

「はい、あなたで五人目です。昨夜高坂は、潰れた私を永瀬さんと一緒に送ってくれただけで、同期という以外接点はないはずです。すみませんね、色々ご心配おかけしたみたいで」

金曜の終業時間はどうやっても少し残業になってしまう。それはどの部も大体似たようなものだけど、帰宅する人の波は集中せずに少しばらける。

そのはずなんだけど、一時間弱残業して更衣室にいく途中の階段で営業部の女子二人に呼び止められ、ちょっと話を聞きたいと言っているのかと聞かれ、付き合っていないよ、と伝えた。そんなに週末の終業後、待つてまで聞きたいことなのか？

更衣室に移動して着替え終わった所に入ってきた企画部の女子二人にまたも呼び止められ、大体似たような事を聞かれた。こういう意味で注目を浴びていたんだなあ高坂人気あるじゃんと考えながら、同じように答えた。

更衣室を出ていつものようにメールをチェックすると、やはり高坂からいつもの簡潔なメールがきていた。

……残業は一時間半で終わらせる。いつもの店。

……Re：缶コーヒーでも飲んで真面目に仕事しろ。お疲れ。また明日。

そんなメールを返信しながら階段を降りて職場を出たら、また待ち伏せしていたかのような五人目の女子に捕まって、以下同文。

「でも……最近いつも一緒に帰ってますよね。今日もですか？」

「いやいや、今日は私一人だよ。うーん、先週から私が個人的に問題に取り組んでてね、高坂ってさほら、結構同期の事心配する奴でしょう。それで一時的に付き合ってくれてただけで、皆が気にするような間柄じゃないから」

「でも！ ……昨日、高坂君が笹原さんのこと送ったって聞いて」「いや、それ永瀬さんもいたから。三人で帰ったんだよ。それは聞かなかった？」

最初に言ったはずの台詞を聞いていなかったように繰り返して三人でと強調し、さらに確認の問いを口にした私に首を横に振る五人目の彼女は、くるくると巻いた茶色の髪も一緒に揺れて、同性の私から見ても可愛らしく見えた。

私に色々聞くより、本人に直撃して気持ちを伝えた方がいいと思うのに。でも相手は高坂があ。

確かに何考えてるのかあんまり分からないから、いきなり告白することを躊躇う気持ちは何となく分かる。

……あれ、この気持ち、何か引つかかるんだけど何だったっけ。

「だけど、あの場は他にも笹原さんと同期の人もいたのに、高坂さんがすぐに、その」

「いやたまたま」

「お姫様だっこして運んだって！」

「側、にいたから……オヒメサマ、ダッコ？ して……？」

彼女から勢いよく繰り出された言葉を思わず復唱したけれど、耳に入ってから脳にまで達するのにはしばらく時間がかかった。そうして脳にその映像がぼんやり浮かんだ瞬間、引つかかっていたのが何だったのかなんて思考は吹っ飛んだ。いや、消え去った。

ちよ、いや、その、何て言葉しか出て来なくて、心の中で叫びな

がら名前も知らぬ五人目の彼女の前で固まってしまった。

何しよつとねー！ 高坂あー！！ 荷物のように抱えるとか、酔い唄を唄う仲間同士のように肩を組むとか他に方法はあるだろー！

「だから、笹原さんが何とも思っていないなら、高坂君に」

「中畑、その台詞は笹原に言っても仕方がない事だと思うが」

岩のように固まっていた私と向き合っていた五人目の彼女（そうか中畑さんと言うのか）の横から声が出たおかげで、よく分からぬ緊張感が少し溶けて視線を動かすと、走ってきたのか背広も着ずに少し乱れた髪の高坂がいた。

諸・悪・の・根・源。

「あー！ あ、あ、あんだねえ！」

「笹原はちよつと待て、後で聞くから。……中畑、そういうことだから、いいか」

高坂に向かって指をさして怒り心頭の私を無視し、高坂は中畑さんへ「ごめん」と謝罪すると、私の腕の上半分のシャツを掴んで引き張るように歩き出した。ちよつと、私と中畑さんとの会話はまだ続いているんだよ！ ていうか！

「高坂、あんた何考えてんの！ 昨日、お、おひ、おおー！」

「何が言いたいのか分かるけど、ここは目立つから少し待って」

自分の口から本人目の前にしてお姫様だつこなんて破壊力のあるセリフを公衆の面前で言うほど私に度胸はない。

そして背の高い人間に背の低い人間のシャツを掴まれているのは、いかにも保護者と未成年という図で、腹が立って思い切り振りきつ

て高坂の手を外すと、すごく不愉快な表情をして見下ろされた。それはこっちの表情だったの！

無言で下からも威圧しながら、先を歩きだした高坂の後を追う。コンパスの違いから少し走るように追いかけることになっているのが更に癪に障った。

第8話

やっと高坂が立ち止ったのは駅の近くの公園で、無言で指さされたベンチに大股で向かい、後ろをついてきているはず高坂を思い切り睨んでやろうと勢いよく振り向いた。

「……何のんびりコーヒーなんか買ってたの！」

「缶コーヒーでも飲んでろって言ってたろ」

ベンチから少し離れた自販機からコーヒーを取り出しながら呆れたような声を返してくる。高坂はブラックコーヒーである缶を開けながらベンチに近づいてきて、ほら、と言って私の分のコーヒーを投げ渡してきた。ミルク入りじゃないと飲まないよ！

「カフェオレだろ」

何気に好きな飲み物を渡されて怒りが一瞬小さくなる。少し小走りして熱くなった手に冷たい缶が気持ちいい。でも懐柔しようたつて、そうはいかないからね。

「……あのさあ、何人にも高坂と付き合ってるのかって言われて否定してるのに、一緒に駅まできたら意味ないじゃん」

「お前、明日空いてるか」

「空いてるよ。って人の話、聞いてんの!？」

未開封のカフェオレをベンチを叩くように置いて、高坂を見上げる。喉を鳴らしながらあつという間にコーヒーを飲み終わった高坂はゆっくりとカフェオレの横に座りながら、少し言い渋るように低い声を出した。

「明日、背広買いに行くから」

「行ってくれば。領収証もらってきてね」

「弁償するって言ったろ、お前が直接見て選べよ」

「いやーだ。また誰かに見られたら誤解される。そつだよ！だから昨日だって誤解されるような、お、おおー」

「軟体動物の様になってるお前をどうやって持てと」

「お前って言うな！」

「じゃあ、可奈」

手に持っていたコーヒーを見つめていた高坂は顔をあげて、視線を合わせながら、私の下の名前を呼んだ。

突然の台詞に、その端整な顔に浮かんだ少し微笑んだような柔らかな表情に、次の言葉が出て来ない。

「……さ、さ笹原って呼べばいいでしょー！」

叫びながら視線を外したけれど、熱が顔に集まっていくのが分かる。何なんだ、私。何なんだ、高坂！

「こ、高坂って、何考えてるのか、ほんと全然分かんない。もうさつぱりだよ」

そつぽを向きながら、さきほど以上の勢いで言い放ちたかったのに、顔に集まった熱のせい、喉も締め付けられたような感じで、言葉がうまく出て来ない。知らず小さく震えるような声が出たのが悔しい。

そつだよ。

高坂って、いつも無表情で皆の話を聞いているから関心何かない

かと思えば、すぐ相手の事を考えていて、必要な言葉をくれたり、何かの資料を集めてきて教えてくれたりする、優しい人だ。仕事も真面目にこなすし、上司の覚えもいい。

仕事中、厳しい討論をする時もあるようだけど、それは必要不可欠だからで、なのにならいつもの無表情からは考えられない冗談も突然言うから、親しく付き合う人には高坂の良さは伝わっていて、部の仲間ともうまくやっていると聞く。やつかむ声もあるだろうけど。

同期の飲み会やどこかへ遊びに行く時、高坂との会話は気楽で、楽しい。ただ優しいだけではなくて、でも突っぱねられるわけでもない。

でも時々わけの分からない言動で私を振り回す。行きつく先の分からない言葉が多くなり過ぎると、私の手には負えない気分になって、高坂の気持ちが多分なくなると、どうしたらいいのか分からなくなると、困る。

「じゃあ、触れてみれば？」

驚いて高坂を見つめると、右手を差し出された。

公園はもう陽が落ちて、いつの間にか電灯が灯されている。先ほどまで少し見えていた高坂の表情はもうあまりよく見えないけれど、影になった表情から見えるのは切れ長の目。その射るような眼差しは真剣で、冷やかして言っているのではないことは伝わってくる。

それでも何を考えているのか、何を意図しているのか分からない。私の手までの距離は約15センチ。当たったら、触れたら、高坂が今何を考えているのか知ることができる。

でも、はいそうですかと触って高坂の事を知るのが、なぜか怖い。動けば当たる距離に、思わず一歩後退する。

「な、な、何で」

「俺が何考えてるのか分からないんだろ。じゃあ聞いてみればいい」

「く、口で言えばいいことじゃない」

「笹原が何を知らたいのか俺には分からないのに、何を言うんだよ」

「私はっ、人の気持ちに疎いって言われるけど、高坂はそんなこと言われたことないじゃん。人の気持ちがよく分かるから、皆と話していても皆が欲しい言葉をかけてるじゃん。だから今だって高坂は私が何を知らたいのかきつと分かってて……」

ん？

私、何か知りたかったのかな。何を知らたいんだろう。話しながらもやもやとした気持ちが沸き上がってくる。

高坂のこと、知りたかったの？ 私。そもそも、何で高坂のこと、知りたいんだろう。

「俺は……笹原から欲しい言葉がある」

右手を差し出ししながら高坂が立ちあがる。そうして生まれたいつもの身長差。差し出された右手との距離。高坂との、気持ちの距離。

「な、何？」

「だから、手を取れよ」

「……いやだ」

こんな自分でもよく分からない気持ちのまま、簡単に高坂の考えなんか知りたくない。

それなのに高坂は後ずさる私を追って、一歩ずつ近づいてくる。だからっ、コンパスの幅が違うんだから、高坂の一步は私の三步！ 言い過ぎだけど、でもそれくらい早く近づき過ぎ！

触れないように両手を背中にまわしてぎゅっと組みながら鞆の取っ手を握りしめる。

電灯を後ろに背負って私を見下ろしている高坂の表情はもうほとんど分からない。私と高坂の距離は目測30センチ。高坂を見上げるのには、首が痛い距離だ。

でも下を向いたらもう差し出された右手が顔に当たる、動けなくなった。息が詰まる。どうしよう。もう何を考えていたのかも分からなくなった。

「……そんな泣きそうな顔するな。余計に」

余計に、何。

そう思った瞬間、数歩高坂が後退した。闇に紛れてため息が聞こえてくる。

「……送る。行くぞ。ちょうど電車が来る」

「う、うん」

急に消えた緊張感にホツとして力が抜けそうになる。……この話で結局、何がしたかったんだっけ？

緩んだ神経が何もかも消そうとするけど、何か大切なことを考えていた気がして、ベンチに置いたままのカフェオレを手に取る。先ほどまで冷たかった缶は、少し汗ばんでいて、最初のような気持ちよさを私に分けてはくれなかった。

自分の気持ちも、自分で自分を触ったら分かったらいいのに。

缶を両手で持ちながら、自分の指と少し前を歩く高坂の手を見て、思った。

第9話

翌日の土曜日。いつものようにぶらぶらと街に繰り出して、気楽なウインドウショッピング。

のはずだったのに。

「ちょっと、早くこれ着てみてよ。ね、永瀬、高坂にはこの色似合うよねえ」

「……だから、なんで永瀬がいるんだ」

「それはこっちの台詞。その色は笹原の趣味でしょ。高坂みたいな背の高さと持つてる物からすると、こっちの色。ほら、さっさと両方とも合わせてみなさいよ。女二人も連れて、試着もまともに出れないなんて馬鹿にしたいわけ？」

喧嘩腰の永瀬を睨みながら、高坂は私の手から奪うように背広を取って袖を通し始めた。鏡の前に移動した高坂を見ながら、店内のスーツを更に物色し始める。

貴重な土曜日の午前中、高坂の好きなスーツショップに来ています。三人で。

昨夜はまた家の近くまで送ってもらい、また暗闇の中、頬に触れられ『明日11時に駅集合』という簡潔な連絡事項を伝えられ、メールで拒否するも、返事は無し。

そういうことならこっちだって明日の約束なんて無視してやる、と目ざましも掛けずに爆睡していたら、朝になって、玄関まで迎えに行くがいいのか、という問い合わせという名の脅しがメールで届いた。

高坂はやる。絶対、家まで迎えに来るやつだ。くそ。

慌てていつものチュニツクとレギンスに着替えながら、永瀬と一緒にランチをしよう奢る奢る、と連絡を取った。

多分いらいらしながらも永瀬は来るはず。だって彼は今お仕事中だから何も予定はないはずだ。

そうして予想通り不機嫌な美人さんは駅に現れ、同時に高坂も到着し、無言で視線を交わして一見お似合いに見える二人を尻目に電車に乗り込ませ、このシヨップまで何とか辿り着いた。そして、今に至る。ふう、やれやれ。

「あんたねえ、何でそう明るい色を持つてくるわけ」

「だって、高坂って表情硬いじゃん。背広くらい明るくしてさあ」

「こんな水色、どう考えても背広と言うよりカジュアルジャケットでしょ。こないだ汚した背広の代わりに職場に着てくのを探してるんじゃないの。違うの、高坂」

私に文句を言いながら高坂に確認を取った永瀬に対して、高坂は少し視線を振ってすぐ逸らした。

「……これでいい」

「ほらねー。ねえ永瀬、このデザインおかしくないでしょ？ だめ？」

「似合うんじゃないの」

「ちよつとー、ちゃんと見てよ。私あんまりセンスないの知ってるでしょ。お兄ちゃんにネクタイをプレゼントしても、着けてくれたのなんて数回っていうのざらなんだから」

私の、お兄ちゃん、という台詞に永瀬の眉がびくりと反応する。

でも何も聞かなかったかのように、背広については肯定の反応があったため、私はじゃあこれでいいよねと清算しようとレジに向かった。

なのに支払う段階になって、高坂が横からお金を出そうとしてきたので、追い払う。

「高坂が出したら弁償の意味ないじゃん。あ、すいません、これでお願ひします」

「笹原」

お店の人にお金を出して伸ばした手を高坂が掴もうとするので慌てて引つ込める。ちよつと！ 分かっててやってるでしょ！

レジの前でしばらく暴れてみたものの高坂の手に阻まれ、ついに私の出したお金はレジにしまわれることなく、支払いが済んでしまった。店員さんが変な顔してたでしょ！

もつさあ、高坂は本当に何がしたいんだ。本気で高坂の手を握りしめて、どれだけ高坂が困っても掴んで離さずについてやるうか。もしたらどんな顔するんだろう。見ものだ。

「笹原あ、その変なにやけた顔、怖いから離れて歩いてくれる」

ランチ予定のお店まで歩いている途中で永瀬から冷たい視線を送られるけど、気にしない。ふっふっふ。あと数分後に同じような表情をする永瀬に、同じセリフを返してやる。

果たして少人数で静かに楽しめるお店に入って席に座り、注文をしようとしていた時、鐘の音といらっしやいませという声と一緒に入ってきたサラリーマンの顔を見た永瀬の表情が固まる。

「永瀬え、その変な顔すつごく怖いから、私達は違うところで食べるね。お兄ちゃん、後は頑張っつてね」

苦笑して近寄ってきたサラリーマンもとい私の兄は、立とうとした永瀬の肩を軽く押して、再度席に戻らせた。

「圭子さん、ごめんね？ 電話にも出てくれないし、メールも返事が来ないから、こうするしか連絡取れなくて」

「笹原！」

「永瀬、午前中付き合ってくれてありがとね、また月曜日ね」

怒った表情を私に向けて兄を見ようとしない永瀬に笑顔を返して、訳が分からないという顔をした高坂の腕のシャツ部分を掴んで、店を出る。あとは兄の頑張り次第だ。多分大丈夫だと思うけど。

「何だ、笹原の兄貴と永瀬が付き合ってるのか？」

「そうそう、私が恋の橋渡ししたんだよー。今週急に仕事が入って前から約束してた日のデートを兄がキャンセルしてから永瀬が静かに切れてさ」

「もう長いのか？」

「付き合い始めたのは半年前だけどね。永瀬がうちに遊びに来たり飲み会の送迎を兄がしてくれたりして知り合ったのは三年くらい前だったかなあ」

お店を歩いて物色しながら、昔の事を思い出す。

さっぱりしている永瀬と、少しのんびりしている兄が彼氏彼女の関係になるとは思ってもいなかったけど、付き合いことにしたと話してくれた兄の表情を見て、私も嬉しくなった事を覚えている。

だから仕事で忙しい兄と会えなくて不機嫌な永瀬の気持ちも分かんなくもないし、仲直りするきっかけを作りたくて私に永瀬の様子を聞いてきた不器用な兄の気持ちも分からなくもない。結局、きちんと話をすればいいのだ、あの二人は。

実はこの間デートがキャンセルになった話を振った瞬間、悪いとは思ったけど永瀬の手に少し触れてみた。だって、直接聞いたってきつと永瀬は答えてくれないし、人の気持ちに疎い私には永瀬の表

情だけ見ても気持ちは想像つかない。

勝手にごめんね、あれ一回だけだから、馬鹿な兄助けと思って許してね。

そうして聞いた永瀬からは、兄の仕事を理解しようとしているけど私との時間はどうでもいいのか、という葛藤が聞こえてきた。

永瀬はさっぱりしているように見えても、内心は不安に感じていて、でもそんなの自分らしくないなんて苛々して、動揺していた。永瀬、かわいいなあ。

だから今朝永瀬にメールを打った後、兄にも急いで今日のランチの場所と時間をメールで連絡した。

永瀬が不安に思っていることや兄の言葉が欲しい事、これで今日仕事で抜けられないなんて言ったら、永瀬と別れるように、もしくは私が別の男を紹介してやると脅迫文を追加しておいた。案の定、絶対行くから絶対連れてきてと兄から返事が来た。合コンに連れて行ったのは黙っておこう。

それにしても、やっぱり二人だ。

「兄はちよつとのんびりしてるから、伝えなきゃいけない所で言葉にしないからね。女ゴゴロの分からんやつだから、ちよつと間に入つてあげたのは、友達思い兄思いでしょ」

そう呟いて、店頭に置いてあるメニューを見ながら、おいしそうだからここにしようよ、と振り返ったら、高坂の呆れたような苦いもの食べたような一直線に引いた口元が目に入る。わー、高坂も変な顔してる。

「……笹原に人の気持ちからんやつと言われるのは、兄貴からしたら心外だと思うぞ」

「大丈夫。兄も私と一緒にで、よく人の気持ちに疎いって永瀬に言わ

れてるから」

私のあっけらかんとした台詞を聞いて、がくりと頭を垂れる高坂の姿が何だか可愛くて、思わず手を伸ばして頭をなでたくなった。

でもそんな気持ちになった自分がよく分からなくて、誤魔化すように高坂のシャツを掠める様に叩いた。

第10話

ランチが終わり、解散、と想像していたら、この後予定があるのか、と問われた。

「特にないけど、高坂は？ 彼女とかいないの？」

「……いたら今ここにはいないだろ」

「だよー。っていうか、そういう話したことなかったね、高坂とは。休みに会うって言っても、同期の皆と一緒にだったし。でも段々皆転勤だの結婚だので人数も減ってきたよね」

「そうだな。……どこか、行きたいところあるか」

「えー、二人でボーリング？ つまんないよ」

「そういうんじゃない」

髪を掻き上げながらため息をつく高坂を見上げる。じゃあどういうんだらうか。あ。

「ねえ、天気いいしさ、わたし行きたい所あるんだけど、一緒に付き合っ気ある？」

「どこだ」

「水族館なんてデートスポットじゃないから安心して。こっちこっち」

そういえばこの駅の近くなら、借りてた写真集のような景色が見れるはず。

ついてくる高坂を時々振り返っては、同期の仲間の馬鹿話をしながら歩いた。

晴れた空の下、ネクタイをしていない高坂は、いつもの硬い表情ではなく、穏やかな表情で返事をする。言葉尻を冷やかしたり突っ

込みを入れられたり、目的地に着くまでの時間はあっという間に過ぎた。

こつという時間はいつも楽しい。

「ここですー」

「見れば分かる。川が好きなのか？」

「川って言うか、この空気感、って言うのかな。この間、部の先輩が写真集を集めてるって言ってたから、景色の綺麗な写真が見たいって言ったの。そしたら川とか海とか、水辺の写真を貸してくれてさ」

綺麗な青空の下、川面がきらきらと光っている。

写真集とは比べものにはならないけれど、街の中のコンクリートと少しの草原で境を定められた小さな川は、涼しげに見えた。川面を滑って流れてくる風が気持ちいい。

「こつというの見るの、好きだったか？」

「んーん。別に好きだったわけじゃないんだけど」

「何かきっかけとか、あったのか。疲れたからとか、気分をすっきりしたいとか」

そういえば、何でだろう。川岸まで近づき、草原を踏みしめながらしゃがむ。

向こう岸には犬の散歩をしているおばさんや自転車を漕いでいるおじさんの姿が見えた。のどかで、いい週末だなあ。

高坂がしゃがんだ私の横に立った。靴、大きいなあ。身長が高いと何もかも大きいサイズになるんだね。それに引き換え私のミュールの小さいこと。

「気分をすっきり、っていうのは近いかも。でもよく分かんない。

何でだろ」

「人の気持ちに疎いだけでなく、自分の気持ちにも疎いのかお前は」
「だからお前って言うな」

「可奈」

昨日のやり取りの繰り返しだと思いついて、笑ってしまう。そういえば昨日は怒ってやり取りしていたのに、今日は笑って話している。そんな関係が、仲間っていいなと思わせる。

それにしても、なんで怒ってたんだっけ。ああそっか、中……中川さんだっけ？ いや違うな。

「高坂って、やっぱりもてるんだね。あの何とかさんに、もう告白されたんでしょ」

唐突な話題を振ったけど返事がない。話についてこれない高坂ではないから、沈黙は肯定の証拠か。

同期と遊んでいる時、女子が固まれば恋の話に花が咲く。誰が一番人気だの、あの先輩はどうだの、誰と誰が付き合っただけで別れただの色々だ。

高坂の話も出た。以前、真剣に高坂に好意を抱いていた同期の友達のことも知っている。その時は気にもしなかったけど、その後その子は他の人と付き合い始めたことからすれば、高坂のことは諦めたのだろうか。

学生の頃から、皆の話を聞いていても恋とか誰かが好きとか、よく分からなかった。皆のこと、好きだし大切だし、友達が悲しければ一緒に悲しくなるし、嬉しい事があつたら嬉しくなる。

でも特定の誰かのことで、皆のように一喜一憂をした事がない。

高坂は、特定の誰かに、そう感じた事あるのかな。

そう思った時、胸が苦しくなった。

何でこんなに高坂のこと、知りたいんだろう。

第11話

入社して四年。

つまり、高坂と知り合ってから四年ほど皆で一緒に過ごしているから、好きな遊びや趣味も苦手な食べ物や先輩も、ちょっとした家族構成も知っている。

なのに、これ以上高坂の何を知りたいんだろう。

昨日もつまづいた、同じ疑問。でも何でこんな感情になるのか、分からない。

「笹原だつて……営業部の村木先輩に告白されたんだろ」

「う。何で知ってんの。職場で言われたわけじゃないのに」
「断ったんだろ」

そう、断った。でも吃驚した。特定の誰かと一緒にいる自分が想像できなかった。

村木先輩とはほとんど接点なんかなかった。顔見知り程度だ。なのに、どうして私のことが、好き、だなんて言えるんだろう。私の何を知って、好意を抱いてくれたんだろう。

それに。

「……自分の事をよく知らないなら、お試してもいいから付き合ってくれって言われても、困らない？ お試して、何さ。……村木先輩、真剣な顔して丁寧に言ってくれたけど、付き合っちゃって私の中ではそんな簡単なことじゃないと思うのさ。なのにさ」

足元の草をつまんで抜いて、ちょっと遠くに放り投げる。ちぎれ

た緑が風に吹かれてあちこちに飛んで、また草原に紛れる。

「笹原の基準が、全員の基準じゃないだろ。付き合ってみなきゃ、分かり合えないって思う人間だっている。まあそれがいいと思うかどうかは、」

また人それぞれだ、と言いながら、足元の小石を大きな掌がさらっていく。少し視線をあげると、高坂の軽く振った腕から小石が小さく弧を描いて川に吸い込まれていった。

じゃあ、私にとって付き合いたい人だっと思う基準はどこだろう。どういふ時間を過ごすことが、付き合いたいっていうことになるんだろう。

兄と永瀬のように、ご飯を食べて、一緒の時間を過ごして、相手は何を考えているのか知って、伝えて、そうして一緒にいたいと思えることが、そうなのだろうか。

高坂も、そうしたい相手が誰かいるのかな。

あの五人目の何とかさんとか。いやでも、ごめん、て言ってた気がする。断った、ということなのかな。いくら疎い私でも、好きな人を目の前にして別の女つまり自分と帰る、なんてことを高坂はしない人だと知っている。

私の知ってる人なのかな。

突然、嫌な気持ちになる。心に何かつかえているような重苦しい感情に、混乱する。

目の前にある風景は、先ほどまでさわやかな気分にかけてくれたのに、急に何も自分に訴えかけないものになってしまって、きつく

両指を交わらせて握りしめた。

「笹原？」

気遣うような低い声がして、高坂がしゃがんで同じ目線に下りてきた。

いつもの身長差より、少し近い距離。

綺麗な黒髪、切れ長の目の中にある、焦茶色の瞳。男の人だと訴える、喉や肩や腕。何もかもが、私と違う。

なのに、会話に違和感はなくて、同じものを見て笑って過ごせる。仕事に対する見方も時間の使い方も少し違っし、趣味も違っけど、それで嫌な気分になるわけではない。

だって、それも高坂だ。

ふいに、永瀬の声が脳裏によみがえってきた。正確に言えば、触れて流れてきた、声。

『忙しいって言って仕事に行くあの人が嫌い。……でも、真剣に仕事と向き合っているあの人のことも、好きなのに』

ああ、そっか。

唐突に、頭の中が整理され、混乱していた思考がシンプルになった気がした。

「思い出した。こうなった時のこと。声が、聞こえるようになった時の、こと」

突然の話題に、高坂の眉が少し上がる。背の高い人のこんな表情を間近で見れるのは、興味深い。

もっと、知りたかった。

高坂の、色んな表情を見たいと思った。

誰よりも近くで、身長差も心の距離もなくして、全部全部、もっと近くで、色んな話を、声を、聞きたいと思った。

第12話

触れると人の気持ちが悪くなるようになったあの日の前日、残業で少し帰りが遅くなった夕暮れ時の帰り道。

一人で鼻歌を歌いながら曲がり道を折れたら、少し前を高坂が歩いていた。背が高いし、持っている鞆に見覚えがあったからすぐ分かった。

お疲れって声をかけて近づこうとしたけど、影になって見えなかった隣の人が、夕日に照らされて見えた。

女性だった。同期の友達でもなく、私の知っている人でもなかった。

同じ部の人なのだろうか、歩きながら資料を見せ合って、二人で少し声をあげて笑ってた。いつも表情や反応が薄い高坂にしては珍しい。この間、先輩に「もっと笑ってみる」って言われた台詞が案外響いてたりして。

私より明らかに背の高いその女性は、高坂が顔を向けても私ほど角度を下げずに済んでいる。

こういう場面は、今までも見た事がある気がする。初めてのことじゃない。

気付くといつの間にか駅に着いていて、先を歩いていたはずの二人はもうどこにもいなかった。ただ、その二人の距離が、目をつぶると瞼の裏に焼きついていて。

高坂も誰かと付き合っているのだろうか。そんなことを初めて考えた。

村木先輩に告白されてから、じゃあ誰からだったら頷くのだろうかと一瞬考えて、誰も思い浮かばなかったと言えば嘘になる。

少し、高坂の顔が頭の隅を掠めた。でも、それ以上考えなかった。

よく分からなかった。

そして、翌朝から、声が聞こえてくるようになっていた。

「あのね、多分……人の気持ちをどうしても知りたかったんだと思う。疎い疎いって言われてたけど、あんまり真剣に考えて来なかったんだよね。だって自分と違う人の事を考えてもよく分からないから、流れるままに、気の向くままに」

でも、初めて高坂の側にいた誰かのことを、いや違つか、高坂が何を考えてるのか、知りたくなった。

そして、自分のことをどう思っているのかも。

ただの同期？ 気の合う仲間？ 話の合う友達？

でも、隣にいた女性のことも考えると、気分が悪かった。考えたくなかった。

だから、忘れた。忘れたふりをして、蓋をして、なかったことにしたかった。

こんな誰かのことを妬むような嫌うような感情を持つ自分が嫌だった。すつきりしたかった。

でも。

じつと黙って私の言うことに耳を傾けている高坂を横目に、川を見続ける。

「いま、やっと自分と向き合った気がするよ」

川向こうを学生さんたちが部活のためだろうか、集団で走っている。青いジャージの一群は、薄い青空と似合ってさわやかだ。景色がまた、綺麗に見えてきた。

しゃがんでいた姿勢を正して、立ち上がる。少し足がしびれた。よろけた私を支えようと、高坂の手が伸びてくる。咄嗟の動作だろう、きつと高坂も忘れてる。私は笑ってその手を取った。

「さ、笹原？」

何だか情けない声が頭の上から降ってきた。手をぎゅっと握って離さないから、きつと困っているんだろう。

以前私を困らせたお返しだ。

しばらくそのままのままでいたけど、強張って動かない高坂が少しかわいそうに思えてきた。

しょうがない、教えてあげよう。

「高坂、何も聞こえないよ。もう」

仰いで見えた端整な顔は、眉を下げて口をきつく結んで、視線はあらぬ方角を見ている。一瞬の間の後、下りてきた視線と目が合う。

「え？」

「いま、高坂が何考えてるのか、もう分かんないの」

苦笑して、答える。ちよつと残念だけど、もう聞こえない。聞こえなくても、いい。

「かわりに、私が今何考えてるか、教えてあげようか」

まだ茫然として繋いだ手と私を見比べている高坂に、声をかける。ちよつと待て、とか唸り声が聞こえてくる。

「本当に聞こえないのか？」

「うん。今お腹すいたって思ってる？」

「思ってるない」

「ほらね。私、人の気持ちに疎いから」

「……急に、何で」

「分かんないけど。いや分かんないことないか。だからさっき言ったじゃん。自分と向き合ったからだよ、きつと」

「……笹原の思考は、俺には分かん」

「そりゃそうでしょ。高坂は、私じゃないもん。でも、だからこそ」

知りたくなつたんだよ。

最後に小さく呟いた声を、高坂が拾う。

「何を」

「知りたい？」

「……もったいぶってどうする。言いたいんだろ」

「うん、言いたい」

にやりと笑って繋いだままの手を見つめて、もう一度高坂を見上げる。

心臓が、はねる。

青い空と高坂だけが私の目に映り、私の心の中もその存在だけになる。

ああ、今までで一番いい顔で笑えているだろうか。高坂の目に、少しでも綺麗に映っているだろうか。そうだといいな。

ゆっくりと手を放して、二歩下がる。

あのね。

「高坂治樹さん。結婚を前提にしたお付き合いを、私としませんか？」

川からの少し強い風が、私のチュニツクを揺らした。高坂の短めの黒髪も、少し揺れている。

何度も、何度も何度も高坂が目を瞬かせた。口を開いたり、閉じたり。そうして、さっき放した手を口元に持って行って、固まった。

こりゃ、ダメかな。そういう対象として私のこと、見たことないのかもしれない。

でも私だってさっき気付いた感情だから、まだ柔らかいそれに傷がつくのは怖い。これでも一世一代の勇気を振り絞ったんだけどな。

「ええと、返事は急ぎませんので……じゃ、またね」

これ以上は高坂を見ていられない。視線を合わせず、その場から逃げだした。

走っている間、顔が熱い。ううん。さっきから、ずっと熱いや。

第13話

翌朝の日曜日。

自分にとつても突然の告白でしかも返事は保留、なんて状況に、今日は寝れないかもとベットの所でジタバタしてたけど、気付いたら朝だった。ああ、よく寝た。

もやもやしてた気持ちがあすっきりしたからかな。色々考えないわけではないけど、今考えても仕方がない。

日曜でも誰よりも早起きのお母さんと、パジャマのまま席に着いているお父さんと一緒にゆっくり朝食を食べた。

食後にカフェオレを飲みながらタロウ君をかまっていると、二階から私の携帯を持ってお兄ちゃんが下りてきた。

「さっきから何度も鳴ってたぞ」

永瀬とデートなのか着替えの済んだお兄ちゃんから携帯を受け取って確認すると、不在着信が三件にメールが一件。おいおい、誰ですか休日の朝から。といつても、もう十時だけだ。

メールフォルダを開くと、宛先は高坂からだった。

一瞬、手が固まる。まさかメールで返事？ いやいや、高坂のとだからそれはないだろう、と気を取り直して、開封する。

・・・電話に出る。

短つ。内容、書いてよ。

受信時間を見ると、十分前か。慌てて掛け直すと、すぐに出た。早っ！ どんだけ緊急なんだ。

「あー。おはよう、笹原」

「どうも、おはよ。ごめん気付かなくて、どした？」

「……今日は親御さんはおられるのか？」

へ。思わず視線を両親に向ける。

新聞を読んでいるお父さんと、コーヒーを飲みながらこちらに視線を向けたお母さんと目が合う。

「い、いるけど。何で」

「……今から三十分後に出かけられるような支度をしててくれ。よければ、親御さんも」

「は？ あ、ちよっと！」

一方的に指示されて電話が切れる。

今から三十分後お！？ 着替えてもないし化粧だってまだなのに！

「お友達から？」

お母さんが通話の内容から何かを読み取ったのか、慌てる私に声をかけてくれた。

「いや、こないだ飲み会から私を送ってくれた人いたじゃん、高坂って言うんだけど。……よく分かんないんだけど、お母さんたちにも支度をしてほしいって。何なわけ？ 意味分からん」

少しの沈黙の後、お母さんが、まあまあ、と嬉しそうな声をあげ、お父さんはお母さんの方を向いて固まっている。

「か、母さん。何か知っているのか。き、聞いてないぞ」

「ほらほら、お父さん、いつものシャツでいいですから着替えてきてくださいね。可奈、早く顔洗って来なさい」

お母さんがお父さんから新聞を奪って、テーブルの上を片づけ始める。

それをぼんやり見ていたけど、時計を見たら時間がないことに気付いて慌てて洗面所に飛び込んだ。

適当ジーンズに着替え、ぎりぎり三十分が経過する頃、どこで待ち合わせするなどの打ち合わせをしてなかったと気付いて、もう一度高坂に電話をかけた。

やっぱりすぐに高坂は出て、もうすぐ着く、と言ってまた電話が切れた。着く……どこに。

そんな時、行ってきます、と言ってお兄ちゃんが家を出て行ってしばらくすると外で誰かと話している声がしてきた。回覧板かな。ひよいと居間から外を見たら。

「え、家に着くってことだったの!？」

高坂が外でお兄ちゃんと話していた。慌てて居間を飛び出して玄関の扉を開けると、二人の切れ端のような会話が聞こえてきた。

「そういう家だから、頑張つて。じゃあ、また」

「はい。よろしくお願いします」

「こ・う・さ・か! 何で家に来てんの! 困るっ」

「困らないだろ。親御さん、おられるんだろ」

小さく抑えた声で話しているのに、高坂はいつもの低い声で一方的に言いながら、肩を押して私の体の向きを変え、開けたままの玄関へと軽く背中を押す。嘘。入るの!？

「なにになになに! 意味が分からない!」

「入れば分かるから。朝から突然すみません」

抵抗は意味をなさず、どうしてか既に玄関の上り口まで来ていたお父さんとお母さんに挨拶された。

展開が、分からない。

「いえいえ。今日は、上げられますか？」

妙に、今日、という言葉強調しながらも、穏やかに微笑むお母さんが対応する。お父さんは……固まったようにお母さんの隣で立ち竦んでいた。ああ、私たちは親子ですね。

「いえ、今日は、ご挨拶に参りました」

第14話

固まっている私に高坂は初めて視線を送ってきた。
表情は見た事ないくらい堅いけど、笑おうとしてる。変な顔。

「笹原さんと……お嬢さんと、結婚を前提にしたお付き合いをさせて頂くことになりました、高坂治樹と言います。同じ職場の同期で、俺は企画部に所属して今年で四年目になります。これから休日など、連れ出させていただきます」

すっと伸びた高坂の姿勢は、綺麗だった。

でも一息で言われた高坂の突然の発言に、誰もが沈黙だ。

私も視線を目の前に移して啞然とする。でもお母さんは沈黙と言うより、お父さんの反応を待っているように見える。困ったような表情で、お父さんと呼びかけているのが聞こえた。

「笹原」

いつもの高い位置から声がある。低い、声。

見上げると、緊張が少し解けたような、高坂の笑顔が目映る。

いつもより、近い距離。

知りたかった、高坂の気持ち、私の手に入ったことになるのだろうか。

「……私たち、同じ？」

「ああ」

「いつから」

「……四年前から」

「ごめん、私は昨日から、かも？」

「かもかよ……でも、もういい」

滑るように伸びてきた右手が、私の左手に触れて、少しの躊躇いの後、軽く握られる。

「ちょっと二人とも、それは後にしてあげて。お父さん、もっと動けなくなるから」

わあ、そうだった。一瞬、お母さんたちが目の前にいた事を忘れてた。

慌てて手を放そうとするけど、高坂は放してくれなかった。

「よろしくお願いします」

そう言って高坂は両親に向かって頭を下げたので、少し引つ張られた手につられて私も軽くお辞儀をした。ああそうか、これが挨拶か。

下げた頭に向かってお父さんの声かけられる。

「あ、挨拶だけ受け取っておく。また来なさい。可奈……後で詳しく」

「じゃあもういいわね。ほら、出かけるんですよ。いってらっしゃい」

動揺しているお父さんの声を塞ぐように、お母さんが割って入る。

「はい、じゃあお言葉に甘えて。荷物、いいのか」

「あ、鞆、取ってくる」

高坂の台詞に、鞆はまだ部屋だったことを思いだして手を放して二階に上る。

鞆とカーディガンを持って下りると、何か言葉を交わしている三人が見えたけど、私があるとすぐ玄関が開けられ、いつてきます、いつてらっしゃい、と声をかけあって、外に出た。

「今日もいい天気だな」

「うん。どこ行くの？」

「……どこ、行こうか」

「え、ボーリング？」

「それしか思い浮かばんのか。ていうか！ 何で逃げた昨日！」

「だって返事なかったじゃん」

「少しくらい待つことはできないのか、お前は！」

「お前ってやめてよ！」

「可奈」

「またか！」

いつものどうでもいい会話が、少しくすぐったく思えて、手を繋ぎながら全開で笑った。

第15話

そうしてひとしきり笑って。

一日が終わる、わけがなかった。

近くのファーストフード店でお昼をテイクアウトした後は、どちらからも話題を振ることもなくひたすら歩いた。

そんな沈黙が続いても、いつもなら気にもしない私だけど、さすがにこの急展開には戸惑う。さっきのは私の付き合ってくださいに対する返事でいいんだよね。

理由を聞く前に両親に付き合います宣言をされたけど、高坂はホントに良かったのかな。色々聞きたいけど、何となく歩いたままでは気忙しい。

少しだけ先を歩いている高坂にどこへ向かっているのか聞こうと思ったけど、この道はいつもの通勤路。何度か家まで送ってくれているからか、高坂は大体近所の地理を覚えているようで、向かっている先は公園かとも思い当る。

そう気付いたらちよっとほっとして、テイクアウトしたハンバーガーの事を考えたら、店のCMソングを自然と口ずさんでしまった。予想通り着いた先の公園は、週末だからか遊んでいる子供たちの声が出たけれど、十二時になったこともあり段々人もまばらになっていく。

そうして空いた公園の奥にあるベンチに座ると、高坂は座らずに私の前に立った。

「座んないの？ あ、まだお腹すいてない？」

「……嫌になるほど普通だな、笹原は」

「普通って？」

困ったように笑う高坂を見上げる。今まで黙ってたのは、高坂も色々考えてたからなのかな。じっくり考えてから話すのは高坂の癖なんだろうけど、今日のはまた随分と長かったなあ。

駅の送り迎えでの時の事を思い出して、苦笑しながら買ってきた飲み物にストローを射す。

「……結婚を前提って、そんな軽い事じゃないだろ」
「ないよ」

「いつから考えてた、そんな事」
「だから、昨日？」

はあ、と深いため息が降ってくる。だって、多分そうなんだから仕方ないじゃん。

ああ、やっぱりこの炭酸飲料は好き。喉を通っていくのが気持ちいい。でも喉の通りがいつもと違うのは、緊張しているからだろうか。

「笹原の兄貴もそうなのか？」
「ああ、永瀬と？ そうだよ。だって、お付き合いするってそういうことですよ。私、今まで誰のことともそんな風に考えたことなかったけど、高坂となら想像ついたから」
「それでいきなり結婚か」
「高坂は、そこまで考えたことないの？」

少しの躊躇いの様な間の後で、高坂が私の隣に腰掛けた。

「正直、そんなことはもつと先だと思ってた」
「じゃあ、やめてもいいよ」

ちょっとストローの先をかじりながら、できるだけ感情を乗せないように言い切る。

はつきり言っつて、男の人の気持ちはあんまり良く分かってない。世間体とか、タイミングとか、色々あるのかもしれない。

でも私がいつかお付き合いする時には結婚前提だと感じて育ってきた。

友達と一緒に恋の話で盛り上がれなかったのは、それがあるかもしれない。自分がまだ幼いのに、家庭を築くなんてそこまで考えられなかった。

どうして好きというだけで、そこまで夢中になれるのかと、実は思っていた。

だから、ちょっと自分は感情が欠けているのだと思っただけで、お兄ちゃんを見ていても似たような感じがしたし、年を重ねるにつれて、恋愛が全てではない友達も増えてきて、そんなことを考えることも気にすることもなくなった。

人の気持ちに疎い人、という評価で十分だった。

この自分の考えを、誰かに押し付けるつもりはない。

詳しく聞かれた事もないから、誰かに伝えた事もない。

でも、もし高坂にこの気持ちを否定されたら……やっぱり辛いかなあ。

第16話

「最後まで聞け。この早とちり」

いつの間にか俯いてた私の頭の上に、高坂の手が撫でられると言
うより押されるように乗せられる。ちょっと泣きそうかも。

だって、怖い。

こんなにも特定の誰かの事を考えなかった私が、高坂の事を考え
るようになって、そうして高坂と同じ気持ちだと、同じ方向を向い
ていると分かったのに、こんなに早く拒絶されたら、どうしたら
いいかわからない。

だったら、早く決着をつけたくなっただって、仕方ないじゃん。先
がないのに、今を楽しむなんて、私には考えられないんだから、し
ようがないじゃん。

「……この四年間の俺の気持ちを、そんな簡単に見限るな。正直に、
気持ちを言っただけだろ。俺の考えを聞く気はないのか」

「……ある」

「じゃあ上向けよ」

少し待っても何も話そうとしない高坂の様子にしぶしぶと顔をあ
げる。

でも高坂の方は見れない。

言った時も勇気がいったけど、聞くにも一世一代の勇気がいる。

こんな気持ちは人生一度じゃなかったか。

「オリエンテーションの時、三井先輩に身長的事馬鹿にされたの覚
えてるか」

急に振られた入社時の話は、記憶になかった。首を振ると、小さく笑う声が聞こえた。

「……今思えば三井先輩も初めての新人教育で緊張してたから、あの口の悪さが咄嗟に出たんだろうけどな。でもそれまでめっちゃくちゃ緊張してた笹原は、急に肩の力が抜けたように笑ったんだよ」

身長的事で子供っぽいと言われたり小学生かとなめられたりするの、昔からよくある事で慣れている。大体、外見を気にして指摘する人は自分の外見にもコンプレックスがあるからだ。自論だけど、三井先輩は、天然パーマの頭がコンプレックスかな。

「それがきつかけ」

「……それだけ？」

思わず高坂に視線を向けたら、高坂も私とは正反対の方を向いていた。でも少し笑ってる？

「悪いか」

「いえ、別に」

もう一度、自分の手元に目を落とす。聞いてみたら大した事のない話。でも。

「そんなこと考えてたんだ」

「……後は気付いたら目で追ってた。経理部の中をちょこまか動いて、企画部の先輩の所に書類を持ってきてはからかわれて怒って笑ってたな」

「だって超くだらないギャグばっか言うんだもん。笑ってあげたの

は武士の情けだよ」

「それでも、殺伐とした空気が漂ってる時は何度か助けられた」

あの、さっきから細細とすごい台詞言ってますか。目で追ってたあの助けられたあの。耳が、かゆい。

そう思ってた時、同調するように高坂が耳に触れた。

「赤い」

息が詰まった。

いつもだつたら十個は返す言葉があるのに、今の私は言葉も抵抗する力も、何も持たない。

本当に小さな子供みたいだ。

高坂の手が、肩より上で切られた私の髪に移動して、撫でるように触れているのが分かる。見えないのに分かるなんて、すごい体験だ。

でも毛先まで高坂の指が来た時、少し引っ張られる。意識が触れられている髪に向いていて敏感になっているから、余計に痛いような変な感覚がして、思わず払おうとして手を伸ばすと、掴まれる。

「好きだ」

いつも聞いている低い声だけど、今の言葉は、初めて聞く言葉。私に向けられた、高坂の気持ち。

普通の告白とはちょっと順番が違うかもしれない。

でも、最初に高坂のこの言葉を聞いていたら、私は今ここまでの気持ちになっただろうか。高坂の気持ちがよく分からなくて、笑って、冗談でしょと済ませていたかもしれない。四年も思ってたという高坂のことを、いつものように何も考えず振り払っ

て傷つけていたかもしれない。

だから、頷く。何度も何度も、頷いた。

初めはただ高坂の考えを、気持ちを知りたかった。

でも本当に知りたかったのは、確かめたかったのは、自分の気持ち。

初めて、ここまで人の事を考えた。自分の事をどう思っているのか気になった。自分のことも知って欲しくなった。

そうして、ずっと一緒にいたいと思った。距離を、縮めたくなっ

た。
だから答えは。

「もっと、高坂のこと、知りたい」

人の気持ちを読めるようになったあの時、全部分かったら相手の事を考えなくなるって思った。知ってしまったら、考えることもなくなるんじゃないかって、漠然と考えた。

でも違っつて、今は言える。

相手の気持ちを分かっても、それでも相手の事を考えなくなる。

何度でも確かめたくなる。何度でも伝えたくなる。

それが、私にとっての恋という名前の感情なのだろう。

「高坂の事が、好き、です」

第17話

改めてお互い告白した後、強めに握られた手を握り返した。

言葉にするとちよつと照れ臭いなあ。でも、言わないと伝わらない。仕方ないか。

いや、仕方ないって嫌な気分なわけじゃないけど、何か、何か、こういう気持ちは言わなくても分かってくれよって言うか。

あ、もしかして、皆こういう気持ちだったのかな。

疎い疎いって、怒られてるんじゃないかって、そこは言葉にしないで雰囲気を感じる、ということだったのだろうか。うーん。だったらその時言ってくればいいのに。でもこれは私には難易度、高いなあ。

ほつとして思考がどうでもいい方向へふらついていたら、高坂の空いている手が私の顔をそつと持ちあげる。

眩しそうに、でもじつと見つめられて、またさっきの感情が舞い戻ってくる。照れ臭くて視線が合わせられない。

でもその持ち上げられている角度は、少し、首が痛いんですけど。ベンチに座ってたって、身長差は影響するんだよ。いつも上から見下ろされる人の気持ちを、高坂だって知ったらいい。

妙に動揺してどうでもいい事を考えている私に、高坂が掠れた声で笹原と呼んだ。

高坂が、色々な気持ちを乗せながら降ってくる。

「あ」

間抜けな声を出しながら、空いていた手を高坂の顔の前に突き出す。少し、掌に高坂の鼻が当たった。

「そういうのは結婚してからで」
「……は」

鳩が豆鉄砲を食ったよう、とはこういう表情を言うのだろうか。

「や、あのです、ね。まだ結婚を前提で付き合う事をお互い同意したというだけで、婚約をしたわけでもないし、高坂だってこれから話を詰めて行ったら、気が変わることもあり得る事で」

「……何を、言ってる」

「だから、まだ何も始まってないのに、そういう関係になることを私は好みません」

きつぱりともはつきり言うには何となく憚られて、あいまいに言うと、それでも高坂は分かったのだろう、ゆっくり離れていって自由になった自分の手を自分の口元に持っていた。

視線は合わないけど、何かフォローした方がいいような気がして思っていた事を口に出す。そうだよ、お付き合いって言うのは、コミュニケーション。円滑な人間関係もコミュニケーションから。

「えーと、まだお付き合いを始めることになったただけですから、まずはお互いのことを知る事から」

「もう行動パターンについては十分知ったと思うが」

「え、だって結婚してどこに住もうと思ってるかとか仕事はどうするかとか、お互いの親はどう思ってるかとか、金銭感覚はどうかとか、そういうこと話したことないよ」

「……どうしてそういう方向に」

長い長いため息の後、感情を押し殺したような硬い声が返ってきた。うーん。この気持ちは伝わらないか。

「だって、大事でしょ。私が高坂に言ったのは、結婚を前提のお付き合いだよ」

「分かってる」

「万が一何かあった時、後悔したくないし、生まれてくる子供だって自信を持って迎える親になりたいんだけど。二人で」

両手を握りしめて肘を膝の上に置いて俯いたままの姿勢の高坂の身体が、ぎくりと強張ったような気がした。

返事をしばらく待っていると、眺めていた高坂の耳が赤く染まっ
ていくのが見えた。おお、これが恥ずかしがっている高坂かあ、初
めて見た。

「笹原と話していると俺は自分が情けなく感じる」

「そう？かわいいよ」

「もうしゃべるな」

「黙ってたら付き合えないと思うけど」

「……いまだけでいいから」

俯いたままの高坂は、前髪を掬うように掻き上げる。

頑張れっってお兄さんが言ったのはこのことか、とか何とかぶつぶ
つ言っている。

その声と仕草に胸を締め付けられるような感覚を覚えて、何だか
手を伸ばしたくなるような衝動が沸きたったけれど、話すなど言わ
れたので心のうちに収めておいた。

十分ほど経っても動く様子のない高坂の横にいたけど、何だか飽
きてきた。しゃべるなど言われたけれど動くなどは言われてないの
で、おもむろに立ち上がる。

いつの間にか飲み終わってしまった飲み物の代わりに何か他の飲

もうかな。自販機でも見に行こう、と歩きだそうとしたら手首を取られた。

驚いて振り向いたら、取られた手首に高坂の視線が注がれていた。わたしの目線までは上がってこないけど。

「手は繋いでもいいのか」

問われた内容よりも話しかけられたことに少し思考が止まって、もう話してもいいのかなと考えていたら、そっと手首から高坂の手が離れて行くのが見えた。

問われた言葉が何だったか忘れてしまっただけで言葉をかけることもできずに思わずその手を掴んだら、高坂の顔が上がって、やっと視線があつた。いつも見上げる顔を見下ろすのは変な感じがする。でも、困つたような表情がちょっとかわいくて。捨てられそうな子犬系？ 真剣な目と表情をした高坂はよく見る表情だったけれど、何だかいつもより少し雰囲気が違う気がした。お互いの気持ちを伝えあつたからだろうか？

「えっと、もう一回言ってくれろ？」

「……もういい」

適当に掴んだ手が少しの躊躇いの後、繋ぎ直されて力を込められる。

やっぱり大きな手だなと思った。男の人の手だ。

でも繋いだ手が異様に熱く感じるのは私の子供のような体温のせいだろうか。子供っぽいと呆れられるかな。でも高坂はこれまでの付き合いからそんなことは実感済みだろうから、呆れようがどうしようが勝手にするだろう。

繋いだこの手からはもう何も聞こえてこないけれど、嫌な感じは

しないのだから。

* * *

「家まで送る」

手を繋ぎながら買ってきたハンバーガーを食べ終わって（食べにくかったけど放してもらえなかった）、立ち上がった高坂の視線はあつという間に高い位置に離れて行って、いつものように見上げる角度になった。これが普通の位置だよね、うん、と感慨深く思っで見上げていたら、一瞬視線を送ってきてすぐ目を逸らした高坂から唸るような低い声がした。

「あんまりそんな目で見るな」

「いつもと同じだけど。ていうか、しゃべるなどか見るなどか、お願いが多過ぎだよ高坂。わたしなんて一個だけじゃん」

繋いだ手をぶんぶん振りながら家への道を辿る。やっぱりこの身長差で手を繋ぐと、若干保護者と未成年気味。もう少しヒールの高い靴でも履こうかな。

「その一個がどれだけ重いお願いなのか、お前は分かってるのか」

「お願いに重さも軽さもないでしょ」

「不公平だ」

「よく分かんないけど、いいじゃない。えーと、治樹くん。これがらよろしくお願いしますよ」

振っていた手が急に力で抑えられるように止められて、少し痛い

くらい力をこめて握られる。

何、付き合ってる付き合っていないの違いはやっぱり呼び方じゃないの。勝手にプライベートに入るなど言いたいのか？ 許可制か？

「……やっぱり不公平だ」

不満そうな声が先ほどと同じセリフを繰り返す。

そして悔しそうな、それでいて優しさを含んだ低い音で、可奈、
という言葉が高い空から聞こえてきた。

終

第17話（後書き）

後書き

（活動報告に書くべきか、最後の章の後に入れるべきか悩みましたが、結局言いたい事が多過ぎて、別で分けさせていただきました。やり方に慣れてなくてすみません……他の方法がありましたら是非ご指導ください）

はじめまして、ネットの皆さま。

拙作にお付き合いただき、ありがとうございます。

お気に入り登録の数字を見た時、うをー！と叫びました。職場のバツカードで。

登録してくださった方々、何かもう、もう、もう、どうしょー！！（落ち着け）

個人的にお礼を申し上げたいのですが、ここで失礼します。本当にありがとうございます。

読み手から書き手へのシフトチェンジはどつにも苦労しました。何で書き手になるうなんて血迷った自分……。でも、書いててすごく楽しかったです。ああ自己満足……。

でも色々な作品を読み慣れている皆さまにとって、どんな作品として映っているのか、正直、気にもなりません。

登録されなくてもチエックして下さった皆様にもお礼申し上げます。ありがとうございます。

というか後書きまで読んでくださっている方にも感謝です。

初めは唐突に浮かんできた長編を手掛けていたんですが、初めての作品が長編はあまりにもハードルが高かった。というか無謀。

結果、言葉遣いや文章能力が低いために進まなくなった所（当たり

前)、急にこの作品のあらすじが浮かんでしまい、ついつい滑るよ
うに書き始めてしまつて、でも結局また停滞して苦勞する、つてど
ちらにしても無謀。

でも、本当のところ、主要人物のイメージが固まつて書き始めたお
かげと、背景を構成しなくても書ける展開だったためか、あれよあ
れよと進んでくれてほつとしました。まあ進んだと言つても200
0文字書くのに5時間以上はかかつてる気がしますけど……他の作
家様方はどれくらいかかつてるんでしょう(滝汗)

読み返せば読み返すほど手を加えたくりましたが、やればやるほ
ど崩壊……限界です。

それにしても一番乗つて書けたのは実は番外編だったり。というか
番外編のために本編があつた、とか言つたらダメですか、ダメです
よね。

ということ、番外編を二つほど書きましたので、また後日アップ
します。

よろしければそちらまでお付き合いください。

また皆さまの感想をお聞かせいただけるとな文章を書ける事を願
つて。

語彙と表現力とあれもこれもこれもどれも、勉強します。

ありがとうございます。

番外編・高坂編

「やーっと。やっとだね、高坂君。やっと」

「何度も五月蠅い」

食堂で食後のコーヒーを飲んでいる時、同じ部の二つ年上の三井がトレイを置きながら声をかけてきた。さっきまで来期の企画案の件でやり合っていたのに、何故わざわざ俺のテーブルで飯を食うのか。

「だって、四年だよ、四年。長かったよねー。大体の人間は知ってるのに、本人だけ別の世界で生きてたよね。そんな人種に落ちた高坂も高坂だけど」

事実だけに、何の返事もしたくない。というか落ちる原因になった場面を生み出したのはお前だ、とは死んでも言いたくない。

あれから週が明けて、まだ火曜日。お前は誰から聞いたんだ。

先週の金曜、久々に周りへの威嚇として食堂で笹原の弁当をこれ見よがしに食べたが、付き合っていると明言したつもりはない。というか、笹原からはそんな匂いすらなかった、あの時は。

そして、寝坊したとメールで連絡があった笹原とは今日はまだ会っていない。

「あの子、小さいから高坂のペースについていけないんじゃないの。歩幅とか、他にも色々」

癖っ毛の短髪を焦げ茶に染めた目の前の男とは、オリエンテーション以来よく組まされていて、部内でも同じチームに振り分けられた。

そうして入社後しばらくは先輩風を吹かした三井から、買い出しだの使い走りだのどうでもいいことに扱き使われたが、同期の遊びに突然乱入してきて散々大人げない戦いを繰り広げた後からは、企画立案時の書類集めから他部署との折衝などの仕事を任された。

三井の端的な指示とシンプルな命令は、自分の自由にできる幅があつて楽に思えたが、返ってくる反応も当たりがきつく、何度も衝突した。それを繰り返しているうちに、三井のやり方にも慣れ、部の方針にも慣れた。

初めは何度も付き合いのつもりで飲んで、打ち合わせては飲み、同期の飲み会にも当たり前のように座っていることを受け入れる頃には、もう先輩後輩なんて意識は馬鹿らしく思えた。そうして無表情と評されることの多い俺の反応を読もうとしていたのだと気付いた時には、三井は気が置けない存在になっていた。

だとしても、男同士、仕事以外に話す内容は限られてくるが、言外に匂わせてくるその手の話は、今は、というより今後当分聞きたくない。

「その顔からすると、笹原ちゃんは手強いみたいだね。四年待つてもなお、苦労」

素知らぬ顔をしているつもりでも、三井は俺の何かを読み取る能力でもついているように、一々苛つく言葉を投げってくる。いつも以上にニヤついた顔が鬱陶しい。

そう。笹原は、待っただけあって今なお手強い。

そもそも付き合ってくれと向こうから、あんな場面で突然言われるとは思ってもみなかった。

初めて二人で出かけることに少し浮かれながら駅に向かった自分を待っていたのは、笹原だけでなく永瀬も一緒だったし、俺の背広選びと昼食はもともあつた笹原の予定の途中で入ったかのように、永瀬と彼氏の仲直りに使われ、拳句に「彼女はいないのか」と呑気な声で問われた。少しは緊張した声で窺うように聞け。

そんな笹原から、まさかこちらから好きだと言っ前に、結婚を前提になんて台詞が聞こえてくるとは、想像もしなかった。というか、できない。

「最初から、苦労しないとは思ってない」

思い出して苛立ちが戻ってくる。狭い食堂の席だったが少し姿勢を崩して足を伸ばすと、不貞腐れちゃってーとからかう様な声で足を蹴られた。

不貞腐れたくもなる。

学生の頃からいつの間にか身に着いていた冷静さは、笹原の前では何の役にも立たない。

四年も好きだった女からの告白。言い逃げされて、追いかける事も出来なかった。笹原から聞こえてくる声は、俺から思考能力を奪う。目の前から笹原がいなくなってもしばらく立ち竦んでいたあの時の俺は抹消したい。

ずっと見ていた人間にあそこまで言われて週末が明けるのを待て

るほど、四年という歳月は短くない。

結婚

上等だ。

今まで誰かに関心を向けることもなく、時々永瀬から何かと引き換えに流されてくる情報からも、男女間の何かを感じることに無かった笹原から、どんな理由であれ自分に関心を向けられ、それがずっと一緒にいてもいいという言葉なのであれば、なおさら出された言葉を無かった事にされるつもりはない。

崩れそうな何かを立て直して、笹原の親御さんに挨拶に向かう段取りや言葉を考えて。

結婚と言うからには良くも悪くもお互いの家が係わってくる。笹原からのあの告白の返事は、親御さんにもはっきり伝える必要のある事くらい、この年になれば弁えている。

気を取り直して緊張しながらも翌朝笹原に電話をすると、いつもと変わらぬ声で応対された。こいつは昨日俺に告白した事すら忘れてたんじゃないだろうな、と疑いつつも約束を押し付け、前提とはいえ正式な挨拶ではない、と意識した服装を選んだ。

何度か行き慣れた道を辿って、初めて見た玄関先には、どこかで見た男が立っていた。

「あれ、昨日会ったね」

「高坂治樹と言います。笹原の、お兄さん、ですよ」

「はい。や、昨日は何とも言えない所を見られて、どうしようかな」

「いえ。……その、今日は挨拶で伺ったのですが、親御さんは御在宅でしょうか」

「いますよ。あれ、可奈と、ですか」

「はい。結婚を前提でお付き合いすることになりました」

笹原と違って、はっきり言わなくても話が通じていく。笹原、兄貴は全然疎くない。お前、合わせてもらってるだけじゃないのか。そう思いながら、勢いで、親御さんに言う前に練習させてもらう。それはよかった、と満面の笑顔で返された。その表情は少し笹原に似ていて、兄妹なのだと感じさせられる。

「きっと可奈が前提の話を持ち出したんでしょうね。驚いたとは思いますが……そういう家だから、頑張って」

将来義兄になるはずの人間からの言葉に少し励まされて、慌てふためく笹原を抑えながら向き合った親御さんは、穏やかな雰囲気ですべて対応してくださった。

この親御さんに育てられたから、今の笹原がある。そう思ったら、緊張の中にも……笹原への気持ちが進み上げてきた。少し釣り上がった目を見開いて見上げてきている笹原に微笑んで、一気に挨拶と笹原への返事を言い切った。

番外編 - 高坂編 2

結局、当の本人への告白の言葉は最後の最後まで後回しになった。

四年も待って、こんな幕引き。そして、幕開け。

人の気持ちに疎いと言われてきた笹原は、人の気持ちが読めるようになったと動揺していた。信じられないとも思ったが目の前で見たし、信じられないほど疎い笹原もずっと見てきた。そんなことはもうどうでもいい。

そしてその状況ゆえに自分の気持ちに向き合い、同期の皆という不特定多数ではなく、特定の人間を、俺のことを知りたいと言ってくれた。今はそれで、十分だ。

例え、今は手を繋ぐだけだとしても、将来を見据えた笹原の気持ちを大切にしたい。そこまで、俺との将来を考えている女を踏みこむような真似はしたくないし、するつもりもない。

携帯が短く振動した。確認すると、笹原からだった。

メールの内容を見て、残っていたコーヒーを飲みほし立ち上がる。

「三井。あの企画、お前の予定通り今月中に何が何でも通すぞ」

「食事中は勘弁」

「待っていても変わらない。上に話をつけてこい。こっちは営業からの条件をあと10%抑えるよう、話をつける」

「待つのは、やめるんだ？」

「タイミングだろ」

にやにやと笑いながら何かと引つ掛ける様に話す三井を無視して、メールで連絡があった場所に向かう。

昼の休憩はとつくに過ぎていて更衣室の前には誰もいない。ここじゃなかったのか？ともう一度メールを確認しようと思つた時、更衣室から笹原が出てきた。

「あ、高坂。おはよー」

「……もう昼だ。遅刻するな」

「はは、ごめんごめん。会社には遅刻してないから大丈夫だよ。昨日メールでしばらく残業が続くつて言つてたでしょ。高坂、昼休憩入つたつて聞いたから、ちょっと抜けて来ちゃつた。はい、これ」

付き合い始めてまだ二日で、しばらく朝しか一緒にいる時間がないうのに、所謂彼氏に対するこの扱いはどうなんだ。そもそも四年待つて付き合い合えるようになったのなら、俺だつてもつと浮かれてもいいはずなのに、たつた一つの「お願い」がそれを抑制する。複雑な心境に天井を少し見上げてから目を落とすと、手渡されたのは、海と青空が表紙の写真集。

「昨日メールでどんな写真集が見たいつて言つてたじゃん。先輩に聞いたら貸してもいいよつて言つてくれたから、持つて来たんだ。高坂もこれから残業続いて疲れたら、これ見て癒してもらいなよ」

にんまり、という言葉がふさわしい笑顔を向けられながら、写真集を青い袋に入れて手渡される。

その表情に顔を寄せたくなる衝動が沸いたが、さつきまで抱いていた決意を掻き集めて、ただ受け取る。

もちろん、手渡す時に出された手に指を絡ませながら。

息を飲む笹原に、これくらいは範囲内だろ笹原も俺も、と言いつつもつかない思考を巡らせながら、可奈、と呼んだら、返事として無言で頬を染めた笹原の表情に今日の午後分だけ癒された。

美人だねと言う台詞には慣れている、と言うと、妬みや僻みの的になる、そのことにすら慣れていく。

おかげでまともな人間関係は築きにくくなっているように思えることもある。職場の人間と、終業後の付き合いをすればするほど、孤立していく気がした。良しにつけ悪しきにつけ。だからといって誰かを恨むほど、卑屈な人間でもない。

でも彼氏だったらもう少し時間を取ったり、週末くらい側にいてくれたっていいんじゃないの。今ここにいない人間を恨みたくなくなる。何の反応もない携帯をアパートで一人見ているのが馬鹿らしい。無機質なそれをベッドの上に放り投げて、カレンダーの過ぎた日に薄い紫のマーカーで丸をしてある部分を一瞥する。ため息だっつくのも悔しい。何だか……自分ばかりが気にしているようで。

知らず睨むような表情になっていたことに気付いて、眉間の皺を緩める努力をする。はあ。結局ため息をついてしまった。

ちょうどその時、枕の上にあつた人の気知らずの機械が振動する。思わずパツと手に取ったけれど、食い付くように反応した自分に、また知らず眉間に皺が寄る。舌打ちしそうになりながらメールを確認すると、笹原からだった。

「あんたじゃないっての」

一人暮らしをしていると、時々思っているだけでなく実際口に出してしまっているが、そんなことを一々気にしているようでは一人で暮らせない。

――永瀬え、ランチ奢るから、11時に駅に来てください、お願いお願い！ 服欲しい。

笹原のメールの内容を見て、倒れる様にベッドに背中を当てて時計を見上げる。あと一時間あるか。

どうせ今日は何もない。何の連絡もない。起き上がって支度を始める。

同じ笹原の名字を持つ別の人間は、月曜の夕方、木曜日に会う約束をキャンセルするために電話をしてきた。でもその約束した日が何の日であるか考えていないような口調で謝罪されて、腹が立って即切つて、携帯の電源まで落とした。付き合い始めてここまで怒れたのは初めてかもしれない。

翌日の着信履歴やメールに、同じ人間からの連絡が入っていた。彼は私のアパートには絶対来ない。それに、どうせ仕事が忙しくて来れない。だから携帯だけが彼と連絡を取る全てだけど、返事もせずに見なかつたことにした。

それから数日、朝と夕方、定期的に着信やメールが来ていたが、すべて無視し、笹原が無理やり入れた合コンに暇をつぶしに行った。そこで潰れた笹原を家まで送ることになった時には、会いたくない顔が浮かんで躊躇したけど、会いたくて会いに行くんじゃないんだから、と言いつつ聞かせて彼の家に着いた十時過ぎ。迎えてくれたのはいつも穏やかな笹原の、彼の母親だけだった。

今夜も残業みたいで、と。本当に残業なのかと疑いたくもなる。でもそれをすぐに否定する自分がいた。彼に限って、あの告白をしてきた彼に限って、そんなことはないと言える。

でも、だからこそ、会いたくなかった。声が聞きたくなかった。自分から全てを閉じているとしても。

* * *

「……笹原。どういふこと」

「あ、電車来ちゃうよ、行こう行こう」

駅に着くと、笹原だけでなく高坂もいて、服が欲しいっていうのはこの間の弁償の話かと思ひ当る。

……高坂も苦労するわね。二人だけのつもりだったんでしょうけど、その表情じゃ。

呆れて笹原に怒る事も通り過ぎ、電車に乗り込むよう急かす笹原の後を高坂と並んで追う。

「高坂……いい加減、言ったらどう」

「あいつが気付くと思うか？ 意識すると思うか？」

「……しないわね。掠りもしないわよ」

恋愛のレの字の気配もない笹原を漫然と見つめる。入社した時から変な子とは思っていたけど、この子の兄と知りあわなかつたら笹原の大切にしている気持ちはずっと分からなかつたかもしれない。

たまに奇特な人間が、笹原の小動物的な動きに惹かれたのか告白してきていたけど、笹原はどの人間の告白にも心が動く事は無かつた。最初のうちは誰か無理やりキスでも奪つてやったらどうなの、と考えたこともあつたが、笹原にそれをしたら生涯傷が残りそうだと彼と知り合つてから余計にそう感じたけれど、過去にそんなことを一瞬でも考えた自分を塗り消したかつた。

昔はそれが当然でもあるかのようにだつたのに、今では彼と思考が似てきている。 違う。私が同じ基準にしたいと望んでいる。

合コンのあの夜、急に酔つたのか倒れた笹原を、障害ともいえる

テーブルをあつという間にどかして、誰にも触れさせないように背
広で包んで抱き上げた高坂の表情は、見た事のないほど感情が表に
出ていた。いつも硬い表情の高坂がこんな表情をするほどの気持ち
を抱いているのなら、本当に笹原を大事にしてくれるのではと思っ
た。酔って半分目を閉じているのに、隣にいた先輩の手から逃げる
様に、目の前に来た高坂の腕を取って握りしめていた笹原を見て、
そう思った。

私を取りたい手も、一人だけ。なのに、彼が取るのは、仕事。こ
の障害は、どうやって取り除いたらいいのだろう。

番外編 - 永瀬編 2

散々色々高坂に試させて、背広というかジャケットを購入させた後、昼食のために探したと言う笹原にしては雰囲気の落ち着いたお店に入る。昔ながらの鐘がドアについていて、小さく鳴った。

週末の昼時なのにたまたま空いていた窓際の席に腰かけ、メニューを開こうとした時、また鐘が鳴った。

何気なく目を向けた後、一瞬息を飲む。ここ数日、見たかった顔がそこにあつた。

「永瀬え、その変な顔すつごく怖いから、私達は違うところで食べるね。お兄ちゃん、後は頑張つてね」

そんな憎まれ口を叩く笹原を睨んでも、笑顔で返される。こちらに向かってくる“お兄ちゃん”と呼ばれた存在は、黒髪をいつものように後ろに撫でつけて、でも急いできたからか、前髪が少し前に下りてきてしまっている。そんな外見が少し視界に入ったけれど、どんな表情を向けたらいいのか分からなくて、視線を下に向けながら無駄だと思いつつも席を立つ。案の定、自分と同じほどの背丈の彼に、やんわりとそれでいて拒絶を許さない態度で席に戻された。

「圭子さん、ごめんね？電話にも出てくれないし、メールも返事が来ないから、こうするしか連絡取れなくて」

苦笑してここで出会う理由を説明する声は聞きたかった声だけど、逃げる様に笹原を睨んだ。でも笹原はもうこちらに視線を向けることなく、高坂と二人で店を出て行った。

残されたのは、私と笹原……慎。

「圭子さん」

「……何」

「えーと。もう泣いてもいいよ？」

「……っ。それがっ、疎いって言ってるのよっ」

躊躇うように、でも優しく響いてくる声からまた逃げたくなって、俯いて片手で顔を隠した。

* * *

「可奈、この店どうやって知ったんだろ」

私が落ち着くまでしばらくの間、黙って待っていた慎がポツリと口にする。

ゆっくり顔をあげると、実はね、と困ったような表情が見えて、彼が続ける。

「この店、この間約束をキャンセルした日に予約してたお店なんだ。でもやっぱり可奈だね。あの子、調整する点に関しては妙に聡いから」

そう苦笑して席を立ち、お店の人に声を掛けに行った。

確かに、可奈は他部署との調整役としてよく動く。各部長や各委員会のメンバーとの打ち合わせ、書類や段取りを任せたら人が変わったように事を動かしていくのを幾度か見た。何故あれが普段できないのか、分からない。

そう考えている間に慎がお店の人に何かを伝え、店員は笑顔で厨房に戻っていく。

「お昼、パスタでいいよね。今二人分注文しちゃったけど……ごめんね？」

自分の好みを知っている相手。パスタだって種類があるんだから……勝手に決めて。勝手に来て。拳句、何に向かつてのごめんか、もう分からない。何に向かつて未だ腹を立てているのか、自分にも分からない。

少し待って届いた温かな料理に黙って手をつける。

こんな風に、一緒にご飯を食べたかったわけじゃない。こんな時間を、一緒に過ごしたかったわけじゃない。

一口、二口と食べた後、持っていたフォークを下ろす。相手の手元を見ていた視線を、躊躇いながら上げると、おいしいね、という顔をした慎が見えた。

「……電話に出なくて、ごめんなさい」

「うん」

「メールも、見てないわ」

「うん。僕もすまなかった」

「こんな時間、過ごしたい訳じゃ」

温かな料理から立ち上る湯気のせいではなく、視界が歪む。

こんな弱い女じゃなかったはず。昼間から、公衆の面前で、泣くような人間じゃなかった。

外見の事で喧嘩を売られ、見知らぬ人間からいきなり峻したただのどこのと文句を言われ、冷静に反応すれば、冷たいと言われる。いつのまにか口調も表情もきつくなっている自分がいた。別にそれで

も構わなかった。今でも、構わないと思う。

ただ、彼の前では、どこか気が緩む。まだ付き合い始めて半年が経ったところなのに。過去、半年以上付き合ったことのある相手にだって、こんな風に食事中に泣いた事なんて、ない。言葉を詰まらせるような経験は、したことがない。

急に泣き出した私に何か拭くものを出したかったのか、あちこちを探して、結局お店の紙ナプキンを目の前に持ってきた慎の行動に、泣きながらも吹き出す。いい大人が。ハンカチぐらい持ってなさいよ。

「泣き止まなくてもいいから、顔をあげて聞いて」

受け取った紙でマスカラが落ちないように下から涙を押さえながら、少しだけ顔をあげる。

伸びてきた骨太の指が、目尻の涙をゆっくり拭いた。

「結婚しよう」

彼の台詞はいつも唐突で、それを聞くのも慣れている。というか、慣らされた。

最初の告白だって、「僕の事嫌いじゃないよね。結婚前提で付き合いますよ」だったわね。

しかも、これから男女混合の同期仲間と遊ぶ店に送ってくれるという時に、着いたお店の前に車をつけて、笹原を下ろした直後に。そして急な事で戸惑う私を乗せたまま、笹原たちに「ちょっと連れて帰るから」と言っつて、私の許可もなく車は動き出し、車の中で小競り合いすること数分。

といつても争ったのは私だけで、慎は最初から穏やかに私を追い詰めた。

確かに好意は持っていた事は認める。

私を妙に褒めることもなく適度な距離を保ち、一緒にいた同期の誰にでも丁寧な態度や親切な口調、居酒屋までの送迎時もお酒の入った人間との会話は荒れがちなのに、怒らせない様に上手く交わっていた。口調がきつい私にも、最初からそうだった。

会話の内容もそれぞれの仕事の内容や家族の事を聞いたり教えられたりと、一方的ではなかった。そんな会話ができる相手には、自然と見る目にも好意の色は入るわよ。

だからって一方的。

だからこそ。

「……もっと私の落ち着いてる時にしてよ……っ」

「それじゃ、圭子さんが可愛くないもん」

「いい大人が、変な語尾付けないで」

「あ、ごめん、圭子さんは冷めてる時も可愛い」

どの口が、こんな甘い、胸やけしそうな台詞を言うのかしら。何度聞いても、慣れない。

でもこの声を、この台詞を聞けなかった間、より寂しく思えるようになってしまった自分自身が何だか苦手だった。

「こんなに怒ったのだって、こないだの木曜日、僕が告白して圭子さんが返事をくれた日からちょうど半年だったからだよね」

慎の台詞にさらに体が強張る。気付いているとは思わなかった。

こんな記念日のように日付を気にしている女だと知られたくなかったのに。だって。

「女の子だよ、圭子さんって」

決まって返ってくるこの言葉。女性扱いではなく、女の子扱い。こんな年齢になって、恥ずかしくない女がどこにいるのよ。しかも身長はそこらの男子と競る、口調はきつい、この私に言うわけ！

「あなたが外見だけじゃなく、中身も可愛いって知ってるのは、僕だけでいいから」

「もう分かったから……今は黙って」
「どうして」

「慎は世間体に疎いのよね……こんな公衆の面前でやられる私の身になってみて」

「大丈夫。分かってやってるから。赤い顔も可愛い」

笹原、あなたは兄さんの本性を少しでも見習う機会はなかったの。

ニコリと満面の笑顔で言い切られた後、周りからよく分からない拍手が起きた。

恥ずかしさのあまり早く食べてお店を出たかったけど、慎はそれを許さず、お店の人からも、まだ準備しているケーキがありますと感動したような表情で言われ、引きとめられた。

そうしてあちこちから冷やかされおめでとうという言葉が掛けられ終えてやっとお店から出た時には、もうメイクも何もかも、めちゃくちゃな気分だった。いつもの私を知っている人間には、絶対会いたくない。

これが一生に一度の結婚を申し込まれた後の女の姿なの？ 違うでしょ。

番外編―永瀬編 4

どうしようもない気分で俯いていたら、手を取られて慎の車まで連れて来られて、気付いたら川近くの公園に車は止められていた。いつの間にか夕方になっていた。

「圭子さん」

「……何」

「僕、頑張りましたから、圭子さんも秋までに準備頑張ってくださいね」

「何の」

「結婚式の」

ランチという本来なら癒されるはずのこの数時間で、気だるさを覚える疲れた体を何とか捻って、運転席に座る慎を見る。何を言ってるのか、分からない。

「ここしばらく仕事が忙しかった理由なんですけど、結婚式の日程を取るために、勝負してたんです。圭子さん、夏暑いのダメでしょ。だから秋がいいかなって。秋に同じ課の人が海外旅行を入れようとしてたから、何とかそれをずらしてもらうのに、上司が勝った方に休暇をやるなんて言い出したものだから。ちょっとむきになり過ぎました」

笑顔で言うこの口調からして慎が勝つたのだろうけど、どうしてか見ず知らずの対戦相手のことが気の毒に思う。

それに、結婚の返事ももう慎の中ではもらったつもりなの。結婚式にまで話はどんどん進んでいる。

私が断るとは思っていないのよね。どこからそんな自信が出てく

るの。私だって卑屈にこそならないだけで、ここまでの自信は持てない。

……でも、それを止めたいとも思わない。ただ。

「慎。こんな展開なのに、あなたは冷静ね」

「こんなくて、結婚の話のこと？」

「そうよ。私達、この半年、プライベートな話もたくさんしてきたわ。私の気持ちもよく聞いてくれたし、あなたの考えも聞いた。意見の相違もあるけど、まあそれはこれから擦り合わせていくことよね」

そう。慎と過ごす将来は、既に自分の中で見えている。どんな家庭にしたいかも。

だけど、ため息は隠せない。

「……こんな話をしている、理性的と言うか、情緒がないと言うか。慎は本当に私と」

言葉の途中で伸びてきた腕に、言葉を失う。

私を助手席のシートに留める様に、右腕はドアに左腕はシートの肩に置き、慎の上半身はいつより随分近い。

見上げたら……まずい距離。咄嗟に顔を窓に向かって逸らせる。

「悪いけど……あんまり気持ちは盛り上がりたくないようにしてるんだよ。あと半年、持たないと困るから」

掠れたように熱のこもった声が、耳元で聞こえる。何が持たないのかと問うほど、幼くは無い。ぞくりと背筋に緊張が走る。

違う。甘い、痺れ。覚えのある、感覚。

慎と付き合うようになってから、ずっと蓋をしてきたもの。

「圭子さんが、僕との将来を想像できるまで、時間を取ったつもりだよ。もう、できたよね。それから、これはまだ言いたくなかったんだけど、情緒がないと言われて黙っているわけにもいかないね」

入れてはいけないスイッチを入れてしまったみたいで、慎のいつもと違う言動に動揺する。

いつも柔らかい雰囲気だから、気付かなかったけれど、でも気付かせなかったのかもしれない。接近している体から、熱が伝染してくる。緊張と期待とで一気に自分の体の熱も上がる。

「あなたの内面に最初から惹かれた。傷ついた分だけ人の気持ちに大事にする圭子さんの事が、好きだよ。口調はきつくても態度は違うから、分かる。……でもそろそろ、その綺麗な外見の何もかもが知りたいね」

最後は小さく、囁くように言われた。そうして届いた彼の吐息が耳にかかる。

どうしよう。

私だって、限界だ。彼の声も何もかも、一番近くで感じたい。知りたい。

それでも、彼が守っているものを私も守りたい。けど少しだけこの右腕に私の熱を伝えたい。口にすることはできなくても。

そっと、額を目の前にある腕に寄せる。慎の匂いがする。車に乗る時、彼の家に行く時、すれ違う時に感じる彼の香り。

圭子、と呼ぶ小さな小さな声が私の髪の毛の合間に溶けた。

* * *

いつもの声の慎が、だからねと咳払いをして熱と共に離れていく。何十分にも思えたその時間はきつと一、二分だったのだろうけど、かつてないほど濃密な時間に思えた。

「結婚、してくれませうね。永瀬圭子さん」

「……はい」

「そういうことだから、あまり夜は二人きりで出かけにくいけど、ごめんね。その分、メール待ってる。声も聞かせて」

「うん」

式までの計画を軽く聞いて、また明日、とアパートの前まで送ってもらった。

結局、彼からの連絡を待つのでなく、さり気なく私からメールを送るように仕向けられたのが悔しい。

でも、この半年しかない過ごし方を思うと、一人部屋も愛おしく思えた。

紫のマーカーを手取る。

もちろん、今日の日付に、まる。

番外編―永瀬編4（後書き）

無事番外編をお届けできました。主人公以外の話というのも面白いものだなあと思いつながら書いていました。

当初想像していた設定より一番おかしくなつたのは笹原兄で、笹原と同じキャラになるはずだったのに、どうしてか書いているうちにまあ永瀬をいじるいじる。

疎い、違い（ニヤリ）。

次の話も書き始めていますが、そちらは活動報告に記載していますので、よろしければ確認して頂ければ嬉しく思います。

では、また皆さまの感想をお聞かせいただけるような文章を書く事を願って。

最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7554n/>

気持ち

2010年10月24日08時39分発行